

報告書

「私たちの SDGs2025～纖維製品の循環をめざして～」

目次

1. はじめに

2. イベント空間の考え方

3. イベント内容

3.1 FASHION SHOW

3.1.1 カテゴリーと作品

3.1.2 ファッションショーの流れ

3.1.3 演出について

3.2 特別講演

3.2.1 前川善一郎 氏

3.2.2 西沢智裕 氏

3.2.3 長田華子 氏

3.3 特別講義（木村照夫 氏）

3.4 展示

3.4.1 企業の取り組み紹介

3.4.2 その他団体の取り組み紹介

3.5 ワークショップ

3.6 トークショー

3.6.1 企業トークショー

3.6.2 学生トークショー

3.6.3 まとめ

3.7 MEGURUFUKU

3.7.1 趣旨

3.7.2 古着回収

3.7.3 UPCYCLE LAB

3.8 Madaikeruyarn

3.8.1 趣旨

3.8.2 作品

3.9 Music Live

3.9.1 趣旨

3.9.2 内容

3.10 提供廃材の物性評価

3.10.1 目的

3.10.2 物性評価

3.10.3 結果

3.10.4 まとめ

4. 総括

4.1 実行委員の声

4.2 学生の声

4.3 来場者の声

4.4 会場提供会社の声

5. おわりに

資料集

資料 1：主催、共催、協賛、資材提供

資料 2：実行委員、参加大学、協力一覧

資料 3：会場レイアウト図

資料 4：参加学生一覧

資料 5：プロダクツ一覧

資料 6：学生アンケート集計結果

資料 7：一般参加者アンケート結果

付録

付録 1：マスコミ報道

付録 2：インスタグラム

付録 3：スナップ写真集

以上

1. はじめに

エンウィクルは、持続可能な社会形成に向け繊維製品の循環を目指す取り組みとして、今年で4年目を迎えます。

本年は、大阪・西梅田の商業施設 BREEZE BREEZE において、これまでのレガシーを引き継ぎつつ、新たな形で本イベントを開催することができました。

本イベントの開催にあたり、ご協力いただきました関係者の皆様、実行委員の皆様、参加学生、そして当日会場を共に盛り上げてくださった来場者の皆様に、心より御礼申し上げます。

また、エンウィクルの取り組みに共感いただき、BREEZE BREEZE 1階メディアコートを特別無償で提供くださいました株式会社サンケイビル様、準備期間から当日まで約半年にわたり、親切・丁寧にイベント運営をサポートしてくださった株式会社 MSC 藤本様、水野様、居川様に、併せて心より感謝申し上げます。

本イベントでは、協力企業から提供いただいた繊維廃材を活用し、学生たちによるアイデアに富んだアップサイクル制作品の展示、ファッショショーンショー、トークショー、ワークショップ、先生方や企業の方による特別講演、特別講義、トークショー、パネル展示など、多彩なコンテンツを展開しました。そしてさらに今年は新たな試みとして、以下の取り組みを実施しました。

- MEGURUFUKU（メグルフク）プロジェクト：一般社団法人 Textile Circular Network との協働で衣類回収および回収衣類の適正処理を実施。
- UPCYCLE LABO（アップサイクルラボ）：回収衣類を用いたリメイクや着こなし提案をイベント会場で実施。
- Fiber Upcycle Band (FUB／ファブ)：日本繊維機械学会繊維リサイクル技術研究会の分科会の実装バンドと MIKI ミュージックサロンのコラボレーションによる、繊維廃材から生まれた楽器を使った演奏会。

いずれも、発見や感嘆、笑顔や歌声が会場に溢れ、参加者の交流を自然と促す取り組みとなり、イベントの意義をより一層深めるものとなりました。

2025年は、大阪・関西万博の開催により、国内外から多くの人々が訪れる、まさに大阪が最も注目される年となっています。その中で本イベントは、述べ約500名におよぶ繊維産業に関わる多様な立場・分野の方々が一堂に会し、意見を交わし、未来に向けた熱気あふれる3日間を実現することができました。

エンウィクルが掲げる「繊維製品のゼロエミッション」の実現には、私たち一人ひとりが衣類廃棄の現状を理解し、課題を共有し、行動へつなげ、継続していくことが欠かせません。この4年間の歩み、そしてこれから継続的な取り組みが、確実に未来を変える一歩となると確信しています。

(文責：宮原佑貴子)

2. イベント空間の考え方－ 空間デザインおよび広報デザインの観点から

難波マルイさんから始まったこのイベントも、昨年度の京都文化博物館を経て、今年度は大阪西梅田の商業施設ブリーゼブリーゼで行うこととなった。ここはドイツの建築家クリストフ・インゲンホーフェン設計により 2008 年に竣工した商業施設であり、国内では当時としては珍しい自然通風を活かした環境対応型オフィスビルである。今回は 1 階中央のメディアコートと呼ばれる吹き抜け空間を利用して 3 日間のプログラムが行われた。

研究室では 3 回生ゼミ生および 2 回生有志の計 3 名のチームを組み、プランニングを始めたが、実は平面計画は今までで一番難航した。講演会、ワークショップ、ファッションショー、そして学生の皆さん及び企業の方々の展示、さらに古着とライブ、販売まで、複雑なプログラムが一か所で行われる。空間の関連性や、明快な軸をどうやってデザインするか。模型や机上のシミュレーションでは限界があり、学生チームと現場で 3 案から 1 案に絞る作業を行った。また、この施設の特徴であった 6 階天井からの約 30m の吊りワイヤーも最終的に使用できるかどうかは直前まで未定であった。そのため、吊り材もしくは柱を立てる、両方の仕様で可能なデザインとして、4 つの LVL バトンを並べた計画を行った。これは展示物の廃棄物ゼロを実現している。また計画に当たっては設置時間も課題であり、これまでの半分以下の時間で設置の必要があり、当日朝約 3 時間で設置可能な計画が求められた。最終、開催 2 週間前に吊りワイヤーの使用が可能となり、設置時間は大幅に短縮された。

デザイン面では、多くのシミュレーションを繰り返している。例えば、吊りバーの高さはそれぞれ 15cm ごとの高さの差が付けられ、服の仕様や立体感を与えながら、精度を許容するデザインとなっている。また廃棄予定の糸を三角形に張った下部の棒は、振れ止めのカウンターウエイトの役割を持ちながら、美しいサイズと重さ、通路の確保といった機能の両立を、幾つかのパターンから最適な寸法や留め方を導き出している。結果は好評で、あの空間にふさわしいデザインになったのではないかと、色々な方が感じてくれていれば幸いである。空間レイアウトは誰でも出来るものであるが、一定のレベルを確保するには様々な思考実験が必要である。それはおそらく研究や商い、さまざまな分野でも同じことがいえる。また今回研究室学生が広報ポスターも担当した。明快なデザインとなったが、ターゲットや広報手法の課題、また販売空間の視覚アピールも課題であり、次年度は上手く解決したい。今回初めての事や整理する事柄も多かったなか、さまざまな先生方や学生、会場のサポートが無ければ実現されなかつたデザインといえる。ここで深く感謝申し上げます。

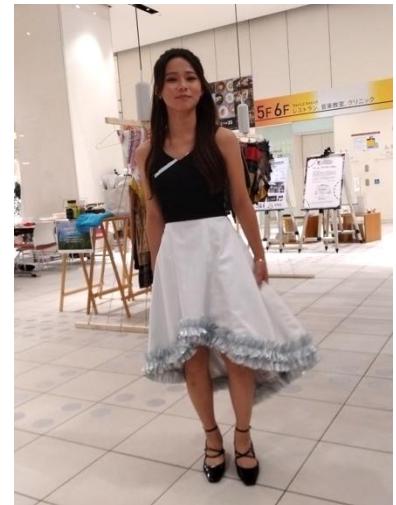
最後に、この原稿執筆段階では最終審査待ちであるが、昨年度の京都文化博物館での空間デザインが日本インテリアデザイナー協会の賞にノミネートされた。1958 年設立の日本を代表する数々のデザイナーが評価された歴史のある賞なだけに、材料費 1 万円にも満たないデザインがどう評価されるかは興味深い。最終審査作品は 11/29 から 3 日間、新宿パークタワー 1 階ギャラリーでパネル展示予定である。機会がありましたら是非ご覧ください。

(文責：佐々木一泰)

3. 1 ファッションショー

3.1.1 カテゴリーと作品

カーテン素材



漁網 & 靴下輪っか▶



漁網 ▶



再資源シート ▶



学生服 ▶



デニム生機 ▶



蚊帳素材 ▶



リボン



着物 ▶



3.1.2 ファッションショーの流れ

会場となる BREEZE BREEZE 1 階メディアコートは、吹き抜けで明るく開放的な空間である。今回、初めてこの会場でファッションショーを実施するため、事前に下見会を行った。当日は、実際の展示品が並ぶ中で現場合わせを行った。田中先生の指導のもと、本番を迎えるまでにも、学生らの中にモデルとしての意識が徐々に高まっていく様子が見られた。

● 事前下見

2025 年 8 月 4 日（月）15 時、会場にファッションショーに参加する学生と実行委員が集合した。まず、空間演出ご担当の佐々木一泰先生から、展示ゾーン周囲のレイアウト計画について説明があり、ファッションショーのモデルが歩く動線が確認された。続いてショー演出ご担当の田中秀彦先生から、モデルの歩くスピードや姿勢、ポージングなどのポイントについての助言があり、実際の動線を想定したウォーキングの練習がおこなわれた。



● 公開リハーサル

事前下見から本番まで約 1 か月の期間が空いたため、本番当日はイベントの中で時間を取り、公開リハーサルによる現場合わせを行った。出演順は、モデルが着用するアップサイクル制作品（衣装）を確認し、田中先生の指示のもと決定した。公開リハーサルを本番の直前に実施することで、モデルの緊張もほぐれ、来場者の方々にも注目していただくことができた。



● 本番

本番は、イベント期間中の 9 月 5 日（金）と 6 日（土）の 2 日間、いずれも 16 時半から実施した。公開リハーサルの流れから、来場者の視線はすでにパフォーマンスエリアに集まっていた。初日の公開リハーサルから 2 日目の本番までの間には、モデル同士の会話や、ともにポージングを決める姿も見られた。交流が深まり次第にリラックスした自然な笑顔も生まれていた。



（文責：宮原佑貴子）

3.1.3 演出について

■会場下見

8月4日（月）のビル休館日に会場下見ができることになり、ショー出品対象学生と教員運営者で下見を行った。ワークショップデスク、販売エリア、展示物など設置物の多いイベントで、ファッションショーのアクティングエリアと客席の関係をどのように設定するかを検討した。ある程度のゾーニングが決定した段階で、その場にいる学生で、簡単な「場当たり」リハーサルを行い、イメージを共有した。

■演出計画

過去の実施では、ステージを設営した回や、周囲全体に客席があった回と比べ、客席が限定された位置になり横長のアクティングエリアになってしまふことと、学生モデルが隠れられる場所が無いこと、また全員が着替えられるような控室がないことなどの、本来悪条件となる空間状況を、ショーコンセプトの中心に据えて魅力となるよう演出計画を行った。

- 1：着替える控室がない → 学生モデルは「着替えない」
- 2：隠れられる場所がない → 普段着で会場で待機しアクティングエリアで作品を着る
- 3：横長のアクティングエリアになってしまふ → 全員自由に歩き回るスタイルにする

■演出コンセプト 「隠すべきもの」を「見せる」

学生全員が着替えられる控室がなかったため、エンウィクルならではの「アップサイクルをデイリーウェアとして」というコンセプトをよりファッションショーとして表現できる演出に組み込むこととした。学生モデルは、自宅から会場に向かう段階で「その上から衣装作品を着ることで完成するスタイリング」を決めておき、衣装作品は展示什器に掛けることで来場者に近くでご覧いただく時間を増やした。ファッションショーの冒頭で作品を着ていく演出を行い、展示されていた作品を製作者本人が装着するプロセスを見る「見せる着替え」の演出でアップサイクルファッションをデイリーウェアとして楽しめることをアピールした。

また、横長のアクティングエリアに、横長の客席ゾーンになったことと、ファッションビルの一階ロビーの雰囲気を有効に活用するため、一本線のランウェイを想定せず、エリアを学生モデルが自由に歩き回る演出で、学生の初々しさと個々人の個性、即興的なショーであることを楽しめる雰囲気をつくりだした。

■公開リハーサル

イベント実施時間中は、常に観客が往来してゐる為、ここでもやはり「見せる」演出で、リハーサルは「公開」として楽しんでいただくこととした。ファッションショーがどのように出来上がっていくのか、学生たちが緊張しながらも楽しんでいる様子を含めて、イベントのメッセージをアピールする時間になればと考えた。

■本番

イベント実施の2日間、公開リハーサルと本番1回をそれぞれ実施した。16:40から公開リハーサル、17:30から本番を上演した。公開リハーサル中から、観客が集まり始めるため、本番では毎回満席に近い状態で上演ができた。

また、学生たちの即興的なウォーキングとポーズを楽しむお客様が、多数お写真やビデオを撮影しておられたり、終演後にご家族や教員と記念撮影を行う学生たちの笑顔が印象深かった。また二日目では、会場の木製の椅子をアクティングエリアに設置し、学生モデルが即興的に座ることができる演出を追加した。これにより、ポーズや動きにバリエーションが増え、空間が一気に躍動的に変化し、学生たちの表情もより一層豊かになったように思われた。

（文責：田中秀彦）

3.2 特別講演

特別講演のテーマは、纖維製品の循環に関連した内容で、かつ大学生が纖維素材や纖維産業の現状を包括的に学ぶことができる内容を念頭において検討した結果、次の3件の講演をお願いすることにした。

3.2.1 「纖維は面白い」～“細くて長い形”は人類の想像力を掻き立てる～ 前川善一郎氏

本講演は、京都工芸纖維大学名誉教授の前川善一郎氏によるもので、古代から現代に至るまでの纖維と人類の関わりや発展について、纖維材料に関する研究的視点や著書の内容をもとに解説された。また、纖維の文化が人類の創造力に与えた影響、直立二足歩行による進化の功罪、さらに持続可能な未来に向けた前川氏の見解についても示された。

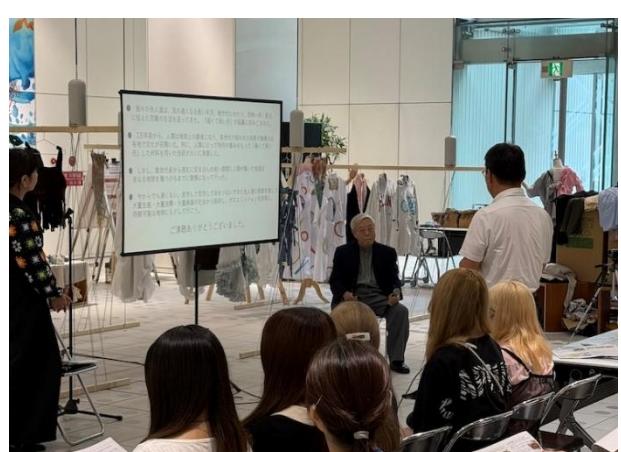
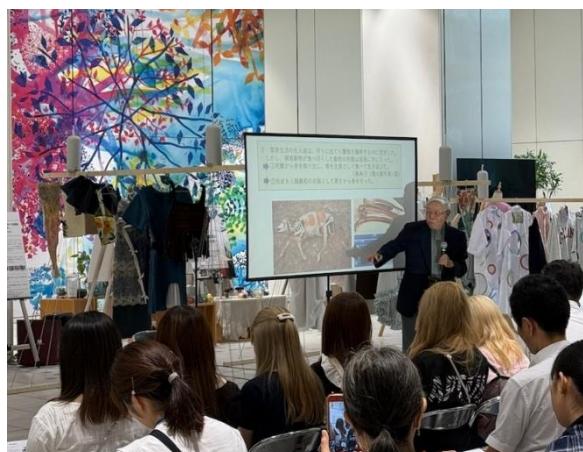
講演タイトルにもある「細くて長い形」は、人類が誕生した約600万年前以降、人類の生活や行動、文化の発展に大きな影響を与えてきた。我々にとって当然の直立二足歩行も、この「細くて長い形」に含まれる。前川氏は、この進化の過程には功（脳の発達、両手を使った創作、発声・言語の発達、長距離移動など）と罪（動物に目立ちやすいこと、獲物の獲得が困難であることなど）の二面性があることを示し、この弱点を補ったのも「細くて長い形」、すなわち骨の利用などであると話された。

そして「細くて長い形」である纖維は、自在に変形するため応用度が高く、日常生活に必要な衣服、道具の創造を通じて、文化の形成や技術の発展に大きく寄与しているという。

また、日本纖維機械学会フェロー会を中心に結成されたグループ「Mr.ファイバーマン」の活動についても紹介された。同グループは、纖維の魅力を子どもたちに伝えるため、実験や体験を通じて纖維の重要性や面白さをわかりやすく教える取り組みを行っている。繭から絹糸を取り出す体験を通じて子どもたちは命の大切さや天然纖維が自然の恵みであることを実感する。締めくくりとして、これから自然環境における天然纖維の持続可能性についての見解も示された。

最後に、現代の大量生産・大量消費の社会を踏まえ、ゼロエミッションを目指すことの重要性についても述べられた。講演全体を通して、纖維の文化や技術が人類の進化に与えた影響と、持続可能な未来に向けた課題を考える大変貴重な内容であった。また、我々の日常における衣類消費に対する姿勢を見直す契機をいただくことができた。

（文責：宮原佑貴子）



3.2.2 メリノウールとオーストラリアのウールサプライチェーン 西沢智裕氏

天然素材(繊維)に焦点をあて、ウールマークの国際認証機関であるザ・ウールマークカンパニーで商品開発・教育・ライセンスマネージャーを担当されている西沢智裕氏に講演を依頼した。

西沢氏は国内ウール一大産地である尾州産地のテキスタイルメーカーで、国内外のデザイナーやブランドとのコラボレーション業務を担当されてきたことから、技術的知見はもちろん、海外だけでなく国内ウール産業についても熟知されておられ、様々な観点からお話を頂いた。

世界には3000種の羊が存在する中で、アパレルに使用される品種は繊維絆が細いメリノ種が大半を占めている。ウールは吸湿性や保温性をはじめアパレル素材に適した機能をもち、主に冬用素材として長年用いられてきた代表的な天然繊維であるが、近年、アパレル素材に占めるウールのシェアは生産量ベースで1%にも満たない現状であるとの報告であった。天然繊維と化学繊維の生産量割合は既に化学繊維が90%を超えることから、化学繊維(特にポリエステル繊維)が衣料の中心的な素材として台頭していることを改めて認識した。一方で、ウールは前述のように様々な機能を有することが知られているが、講演の中で述べられていた衣料用繊維の中で最も高い吸湿性を有しており、吸湿した水分の気化熱によって涼感を備えることや、大きな防臭性能を有していることから、夏用素材としても適した素材であることはあまり知られていないことである。

加工によって施される化学繊維の様々な機能や特性は消費者にとって魅力的ではあるが、自然の恩恵がもたらす天然繊維の機能を見直し、天然繊維への回帰や利用促進を考えることもサステナブルの観点から重要なテーマであると改めて感じられた。

化学繊維が台頭する現代において、学生のみならず我々研究者にとっても、長く人類が使用してきた天然素材(繊維)の特徴や魅力を見直すよいきっかけとなった。

(文責：三宅 肇)



3.2.3 低価格の洋服と作り手、生産地の「今」一試される、私たちの向き合い方 長田華子氏

特別講演の3日目は、茨木大学人文学部社会科学部准教授の長田華子先生にお話しいただいた。長田先生は社会学者として、ジェンダー、アジア経済や地域産業、女性労働についてのテーマで研究されている。

洋服の低価格化は国内外で広く社会に浸透しているが、この問題の背景には縫製業に従事する女性行員の低賃金の問題がある。長田先生は、それは単に一つの視点でなく、アパレル、ファッション業界全体の構造的な問題が絡んでいることをわかりやすく説明された。そして、長田先生が、欧米や日本からの多くの洋服生産を担っているバングラデッシュにこれまで訪れて、実際に現地の縫製工場で働く人の状況をとらえた調査内容を、語り掛けるような現場のお話として解説された。それらは人間と向き合うことでしかわからない内容であり、洋服の生産地がいかに疲弊しているかを伝えていただいた。ここに響くこの講演を聞いた人は、低価格の洋服についての問題を強く身近に感じ取ることができたのではないか。

さらにバングラデシュの話に加えて、少数であった日本国内の縫製工場について調査された報告として、低賃金を背景に働き手が急激に減少している事例も説明された。こうした現状の中、欧州ではどうしたら作り手や生産地の状況を改善できるかに取り組む事例があり、消費者として何ができるか私たちにも考えていただきたいとのことであった。

日本では洋服の縫製の大半を、工賃の安い他国に委ねているのが現実であるが、モノづくりに携わったことのない人や、若い世代の中には、洋服は機械のみで作られていると思っている人がいるということを、私自身、授業などを通じて感じことがある。また低価格の傾向が長く続くことで、洋服の価値が著しく低下していると多くの人が感じながら、それらを問題として考えることや、背景を知る知識や情報を得る努力があまりにも足らないことを痛感した。

低価格の洋服について、その生産は機械によるものではなく、低賃金で担っている人の存在によるものであること、低価格の製品が成り立っている背景には、構造として容易に変えられないどのような課題があるのかを、考えることのきっかけとなる内容を伝えていただいた特別講義であった。

(文責 森下あおい)



3.3 特別講義

今回の特別講義は、繊維リサイクル技術研究会委員長であり、京都工芸繊維大学名誉教授である木村照夫 氏にご講義をいただいた。木村先生は、2002 年には「繊維リサイクル品からなる家を作ろう」、2004 年には「繊維廃材から船を作ろう」と、早くから繊維廃材に着目され、今年で 4 年目になる「私たちの SDGs」においても、本活動の真髄となる本質的課題を常に意識したご助言で活動を牽引してくださっている。

この度は、『繊維製品のサーキュラーエコノミーをめざして』と題し、「今、なぜ EWC なのか」についてご講義をいただいた。

ファッション業界は、石油産業に次ぐ、第 2 の環境汚染産業といわれている。環境省によると、原材料調達から製造段階までに排出される環境負荷として、CO₂ 排出量・水消費量・端材等排出量に加え、化学物質による水質汚染などが挙げられている。衣類の国内新規供給量は計 79.8 万トン（2022 年）に対し、使用後に手放されるのはその約 9 割、リサイクル・リユースされるものもあるが、その多くが廃棄されている。木村先生は、SDGs の目標 12:つくる責任 つかう責任を衣服に当てはめた時、つくる責任は、無駄に作らない易リサイクル設計を意味し、つかう責任は、無駄に買わない、大事に使う、むやみにステナイことだと表現する。

現在、全世界のファッション業界から発生している繊維廃棄量は、年間 9200 万トンと推定され、2030 年には 1.5 億トンの繊維廃棄が予想されている。一方、世の中のムードは、経済重視型から環境重視型へと移行している。いかにゴミにせず、循環できる素材を作るかは、最上位課題である。そのような状況を受け、フランスでは、2020 年 2 月に売れ残りの衣類廃棄禁止法が交付され、売れ残った衣料品は寄付やリサイクルが義務付けられるようになった。イタリアのファッションの国立商工会議所「カメラ・メティオナーレ・デラ・モーダ・イタリアーナ (CNMI)」でもファッションの循環型設計を導入・課題として取り上げるなど、EU では法の制定が進んでいる。日本においては、このような法の規制はなされていない。繊維廃材の問題を如何に日常生活に持ち込むか、如何に自分事として繊維リサイクルを捉えるかについて、考える必要がある。

大学として、古着問題にどう貢献できるか？2022 年より始動した「私たちの SDGs」は、今年で 4 年目の活動となり、参加学生は毎年増加し、関西の 11 大学・約 100 名の学生が取り組んでいる。繊維素材は、産業の垣根を超え、各種協力企業よりご提供いただき、学生の手によりアップサイクル製品の衣装製作と披露・展示・ワークショップ等を行っている。こうした活動は、学生にとってリアルな廃材を手にし、現実問題として廃材という資源について考えさせられる機会につながる。今年は、EWC と（一社）Textile Circular Network が連携し、古着の回収を実施している。MEGURUFUKU と掲げ、廃棄衣類の再利用が当たり前の文化の定着、そして、古着回収活動の輪を広げ繊維製品の循環の促進をめざす。

持続可能な社会の構築に向けて、個々人で何ができるか、何をすべきかを考えることから始めることが大きなムーブメントの第一歩になる。とはいって、「楽しくなくちゃやってられない！」。活動に参加した学生の背中に風を送ってくださるような時間であった。

（文責 谷 明日香）



特別講義（木村照夫 氏）

3.4 展示

3.4.1 企業の取り組み紹介

学生諸君にとって、繊維廃材に対して企業がどのように取り組んでいるかを知ることは重要であり、一方で、企業にとっても各企業の取り組みを学生のみならず、一般の方々にも伝えることが大事かと考え、今回は最近注目されている4社に御願いして各社のアップサイクル事業をパネルとサンプル展示で紹介して頂いた。

1) **シキボウ株式会社**は様々な取り組みをされているが、今回は落ち綿を樹脂の強化材として用いた複合材料ペレット（コットレジン）の紹介と繊維廃材から新たに糸を作り出す「彩生」プロジェクトの紹介があった。なお、繊維リサイクル技術研究会では京都工芸繊維大学D-Labと共同で、3Dプリンターを用いた楽器の制作にチャレンジしており、コットレジンを用いた試作品（ギロ）も展示して頂いた。



2) **東洋紡せんい株式会社**は、コットンの廃材から高付加価値のある再生糸（さいくるこつと）の開発を行っており、出来上がった再生糸と、それを用いた種々のプロダクトが展示された。「さいくるこつと」は、繊維長が揃っているとともに他社では実現できていない細い糸づくりに成功している。



3) スタイレム瀧定大阪株式会社は多くの企業とコラボして PLUS∞GREEN PROJECT を立ち上げている。このプロジェクトは、従来廃棄される衣類などのポリエステル繊維をリサイクルし、培地を中心につまざまなきっかけを提案することで、人々がサステナビリティに親しみを感じるライフスタイルの実現を目指している。今回のブースでは開発した培地を中心に展示された。



4. 大塚産業クリエイツは、自動車内装品の製造過程において生じる不織布端材を選別・反毛して、河川護岸工事用の不織布シート原料としてリサイクルしている。また、自動車シートカバー製造工程から生じるウレタン廃材を選別・粉碎してシート加工原料としてリサイクルしている。これらのサンプルが展示された。



3.4.2 その他団体の取り組み紹介

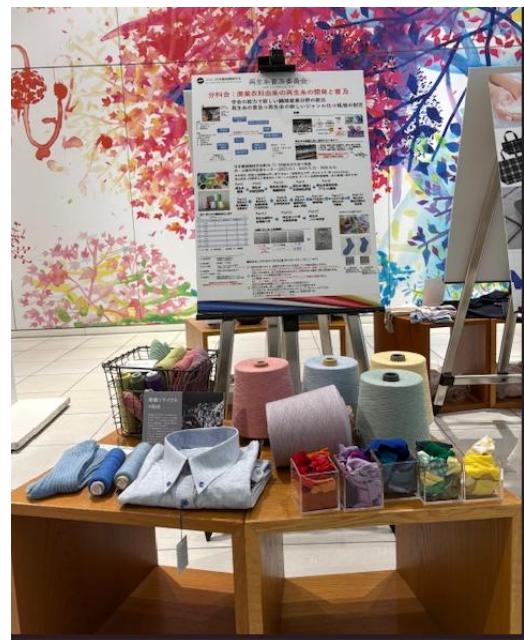
その他の団体からは（一社）Textile Upcycle Platform（通称：TUP）と日本繊維機械学会に所属する「再生糸普及委員会」ならびに繊維リサイクル技術研究会の下部組織である「繊維廃材から楽器を創造する分科会」（通称：FUB）がそれぞれパネルとサンプル展示を行った。

1) TUP（代表理事：木村照夫）は繊維廃材のアップサイクルを目的に設立された団体で、現在約20社が所属している。今回は会員約10社がそれぞれ開発中のプロダクトを展示した。

2) 再生糸普及委員会は、種々雑多な繊維素材が混ざった繊維廃材を繊維の素材ごとに分離することなく混ざったまでの再生糸の開発と普及を目指しており、今回は開発中の再生糸と、それを用いたプロダクトが展示された。



TUP



再生糸普及委員会



FUB

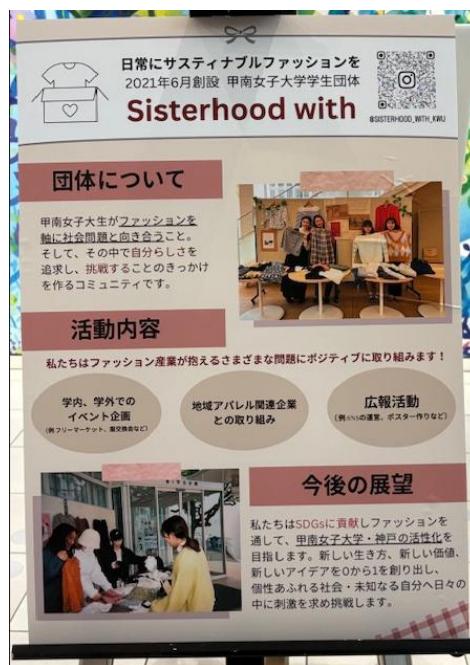
また、今回は古着回収をテーマの一つとしたが、Team エンウィクル以外で既に古着回収を行っている関西大学環境保全委員会、京都工芸繊維大学学生サークルアース、ならびに甲南女子大学学生団体の取り組み紹介のパネル展示もあった。Team エンウィクルでは、今後はこれらの団体とのコラボ体制を強化して行きたいと考えている。



関西大学・環境保全委員会



京都工芸繊維大学・アース



甲南女子大学・学生団体

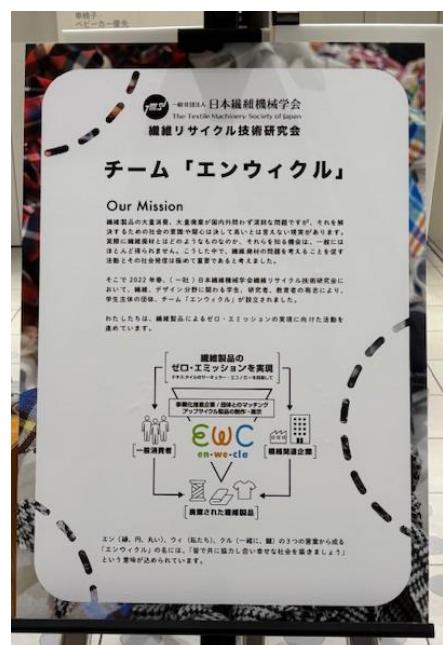
さらに、古着回収のコラボを行った（一社）Textile Circular Network（通称：TC-Net）からも、取り組みについてのパネルが展示された。



その他、主催団体である纖維リサイクル技術研究会や Team エンウィクルの紹介パネルも展示された。



纖維リサイクル技術研究会



エンウィクル

（文責：木村照夫）

3.5 ワークショップ

参加者が実際に手を動かし、繊維製品の循環や SDGs への取り組みをより身近に感じてもらうことを目的に、学生団体（大学）によるワークショップを開催した。今年度は、大阪樟蔭女子大学・京都光華大学・甲南女子大学・四天王寺大学短期大学部・立命館大学の 5 大学が参加し、それぞれの特色を活かしたブースを展開した。

表 各大学ワークショップ内容

大学	ワークショップ名	体験
大阪樟蔭女子大学	タッセルクラフト	布端材を組み合わせたタッセルづくりを行い、素材や色を自由に選んで小物に仕上げる工程を体験するワークショップを提案した。
京都光華大学	キーチャーム作り屋さん	リボンや小さな布切れを組み合わせてバッグや持ち物につけられリメイクチャームを制作した。
甲南女子大学	古着のぬくもり、手のひらサイズに	廃材を用いたオリジナルバッジを制作し、日常的に使える小物として廃材の新しい利用方法を提示した。
四天王寺大学短期大学部	FUKU たちの恩返し	「裂き織り」の技法を取り入れたアクセサリー制作を行い、布を細かく裂いて織り込みながら形にする工程を来場者に体験してもらった。
立命館大学	サステな小物作り	簡単なキーホルダー制作と、フェルトを素材に小さな動物の形を縫い合わせる体験を提供した。猫などのモチーフを用い、針と糸で布を組み立てる工程を通じて、日常的に手に取れる作品作りを提案した。

参加者は平日・休日を通じて幅広く、平日にはビルのオフィスワーカーが立ち寄る姿があり、短い時間で作品を作り上げる様子が見られた。休日には家族連れが多く来場し、子どもと保護者が一緒に素材を選び、作品を手に取る場面もあった。このように、世代や立場を超えて多様な参加があり、それぞれが廃材に触れながら制作を行った。

作品づくりの流れは、素材を取り、色や形を検討し、組み合わせて形にするという一連の過程で進められた。完成品をその場で身につける人や持ち帰る人も見られ、日常での活用を意識する機会にもつながった。

この取り組みは、廃材を「不要なもの」として扱うのではなく「新たな資源」として活用する視点を社会に伝えるものであった。参加者にとっては資源循環を体験的に理解するきっかけとなり、学生

にとっては企画や説明を通じて対話力や発信力を養う機会となった。学生のアイデアと参加者の制作体験が交わることで、アップサイクルの意義と可能性を共有する場となった。



ワークショップの様子

(文責：川村朱乃・西晃平)

3.6 トークショー

企業および学生トークショーは、パネル出展企業によるSDGsやサステナブルに関する事業紹介や、参加大学による取り組み内容について発表を行い、学生と企業や参加者が自由にトークを行う内容で、2日間に分けて開催した。

3.6.1 企業トークショー

1日目は、シキボウ株式会社と株式会社V&A Japanが発表した。

シキボウ株式会社からは、戦略素材企画推進室課長の近藤智彦氏が登壇され、廃棄される綿素材を樹脂と複合したバイオマス複合材“コットレジン”や、廃棄糸から再び糸にした“彩生”など環境配慮型素材について紹介された。

株式会社V&A Japanは、テキスタイル開発・輸出入・アパレル販売を展開している企業で、本イベント会場であるBREEZE BREEZEにもセレクトショップMANOを出店されている。代表取締役会長の宮本淳氏が登壇され、生分解性ポリエステルCRAFTEVO® ReTE（クラフトエボリーテ）を使用したオリジナルブランドTavitalium（タビタリウム）について紹介された。

2日目は、東洋紡センイ株式会社とスタイルム瀧定大阪株式会社が発表した。

東洋紡センイ株式会社からは、マテリアル事業部原糸販売グループの大島亨氏が登壇され、綿原糸の生産から供給に至る一連の流れや、長纖維で高品位なリサイクル綿を高混率した細番手リサイクル綿糸「さいくるこっと」について紹介された。

スタイルム瀧定大阪株式会社からはR&D室の阿多憲明氏が登壇され、R&D室のサステナビリティへの取り組みや、古着などのポリエステル纖維をリサイクルした「纖維から生まれた土」TUTTI（トゥッティ）について紹介された。

各発表の司会進行は、学生が分担して行った。進行担当学生は事前に企業の取り組みなどを予習して質問を考えるなど、進行の役割を学ぶことができた。また聴衆学生は、企業の生の取り組みを聞くことで貴重な学びになったと思われる。



企業トークショーの様子

3.6.2 学生トークショー

学生トークショーは、各大学の活動状況や取り組み成果、イベントに対する考え方などを大学間で共有するとともに、企業参加者からの様々な意見を聞いて、今後の活動につなげていくことを目的に、2日間に分けて8大学が発表した。

学生による司会進行の中、持ち時間15分で発表およびディスカッションが行われ、活動報告や製作品のポイント紹介、イベントに参加した感想や苦労話など自由にトークを繰り広げた。京都女子大や立

命館大からは学内活動団体(KUMO(京都女子大)・Rits CLO(立命館大))が普段学内で実施している古着回収や取り組みを、大阪樟蔭女子大からは学内ブランド製品の製作について紹介された。京都光華女子大や四天王寺大短期大学部、成安造形大、甲南女子大からはファッショショニーに先立って本イベント用にアップサイクルした衣装の紹介をされた。甲南女子大は実際にモデルが着用して、それぞれの作品のコンセプトや特徴、製作時に苦労した点などの発表を行った。物性評価を担当した大学(神戸大)からは布の風合い評価について報告されたが、普段繊維の物性について学ぶ機会の少ない他学の学生にとっては大いに参考になる内容だったと思われる。



(京都女子大)



(京都光華女子大)



(大阪樟蔭女子大)



(神戸大)



(立命館大)



(成安造形大)



(四天王寺大短)



(甲南女子大)

学生トークショーの様子

3.6.3 まとめ

トークショーの狙いは、企業が学生に対して、逆に学生が企業に対してそれぞれの取り組みを発表することで、学生にとっては技術動向を学ぶだけではなく、実際に企業が行っているモノづくりに対する考え方を身近に知ることができることである。また企業にとっては、固定概念にとらわれない大学生の取り組みから斬新なアイデアを抽出したり、今後の業界を担っていく人材がどのような観点でモノづくりに取り組んでいるのかを知るきっかけになることである。

本イベントの主旨であるSDGsや繊維製品の廃棄問題を“わたしごと”として捉えることに対して、大学生、企業ともに自分たちの活動を整理して改めて自分達の活動の意義を振り返るよいきっかけになったと思われる。

(文責：三宅肇)

3.7 MEGURUFUKU

3.7.1 趣旨

繊維製品の循環を考える場合、古着回収をいかに効率よく行うか、すなわち一般ごみと一緒に焼却処分場に行っている、まだまだ資源として使用できそうな古着をいかに回収するかが問われており、環境省では「度持続可能で循環型であるファッショングに関する検討会」を設けて、古着回収に関する種々の議論がなされている。また、経産省の繊維産業小委員会では繊維製品における資源循環ロードマップにおいて家庭から廃棄される衣類の量を2030年までに2020年度比で25%削減させることを目標にしている。現状において古着回収が進まない理由の一つには回収した古着の有効活用法が確立できていないことであり、上記ロードマップでは手放される衣料品のうち、繊維 to 繊維リサイクルすることによって5万トンを処理することを目標にあげている。

そこで、Team エンウィクルでは、今回のイベントで古着の実態を調査し、回収された古着の資源としての活用方法について考える機会にすることにした。

3.7.2 古着回収

イベント開催会場だけでは古着回収量がどれほどになるかが不透明であったため、Team エンウィクル所属の大学を中心に事前に古着を回収し、回収した古着を開催場所である BREEZE BREEZE に集めることにした。各大学における回収事業開始のタイミングが7月から8月にかけての大学の夏休期間中となり、さらに回収期間は各大学によって1~30日とまちまちとなったが、各大学平均では約20kgの古着が回収でき、トータルでは200kgを超える古着がBREEZE BREEZEに集められた。回収したアイテムとしては比較的回収量の多かった4大学について見てみると、大学間に差があるものの、圧倒的に多いのがTシャツ関係であった。次いで、ジーンズ/パンツ、スカート類が多かった。これらのデータは改めて整理して別途公表できればと思っている。なお、各大学での回収箱設置状態の一例を下図に示している。

(文責:木村照夫)



大阪樟蔭女子大学



京都女子大学



神戸大学

3.7.3 UPCYCLE LABO

ここでは、イベント期間中に実施した「UPCYCLE LABO」の活動について、参加学生の視点からまとめた内容を報告する。

UPCYCLE LABO は、今年初めてイベント会場の一角に設けられた、学生が主体となって回収衣類に新たな価値を生み出すことを目的とした実験的な場である。会場内では、回収ボックスから取り出した衣類をもとに、学生同士が意見を交わしながらアイデアを膨らませ、リメイクやマネキンコーディネートをおこなった。こうした創造的な活動を通じて、大学間の垣根を越えてものづくりの楽しさを共有するとともに、まだ十分に着用可能な衣類が廃棄されている現状を、自らの手で体感的に学ぶ機会となった。

下記は、UPCYCLE LABO のラボ長を務めた学生が、活動を通じて得た気づきや交流の様子、そして見えてきた課題や今後の可能性についてまとめたものである。

(文責：宮原佑貴子)

記

UPCYCLE LABO の実施を通して

【UPCYCLE LABO の目的】

イベント会場や各大学で事前に回収された衣類を用い、学生たちのアイデアによって新たな価値の創出を目指す。

【実施内容】

MEGURUFUKU プロジェクトにより各大学で事前に回収された衣類と会場で回収した衣類を用いて、企業提供の繊維廃材と組み合わせたりメイクやマネキンへのコーディネイトをおこない、会場内でアップサイクル（＝リメイク）の実演をおこなった。

完成した作品は会場内で展示や学生らが着用して撮影をおこない、その様子を SNS で発信した。

【ラボスタッフの役割】

3 日間の各日・各時間帯に、各大学から 2 名程度がラボスタッフとして参加した。
それぞれの役割は以下の通りである。

〔ラボ長〕

ラボスタッフ同士による共創を主導し、実演で使用する衣類・繊維廃材・道具などの管理をおこなう。

〔ラボスタッフ〕

ラボスタッフ同士で意見を交わしながら、回収衣類のリメイクやマネキンコーディネイトによって「着たくなる・使いたくなるもの」へとアップサイクルする作業をおこなう。

【イベント期間中の様子】

ラボスタッフとして参加した学生の中には、初日に担当した後も自主的にラボを訪れ、制作を続ける姿が見られた。担当時間外にも積極的に活動に参加する学生が多く、学びや創作への意欲がうかがえた。また、普段はミシンを使用しない学生が、他大学の学生の取り組みに刺激を受け、ミシン制作

に挑戦する姿もあった。グループで参加した学生は、古着を使ってマネキンに新しいコーディネートを提案するなど、自由で創造的な表現を楽しんでいた。さらに、異なる大学の学生同士が互いのアイデアやデザインについて意見を交わすなど、活発な交流も生まれていた。

一般来場者の中にも活動に関心を示す人が多く、なかには持参された衣類をラボスタッフのサポートのもと、巾着袋ヘリメイク体験に参加する方もおられた。また、来場者が回収 BOX に入れたアイテムをその場で学生がリメイクし、完成した作品を目にした来場者が驚きや喜びを表す場面もあった。

【参加学生の声】

「まだ着られそうなのに！」「新品なのにもったいない！」といった声が多く聞かれた。制作やコーディネートを通して、まだ使用可能な衣類や新品同様の衣類が廃棄物として回収されている現状を知り、多くの学生が驚きや疑問を感じていた様子であった。また、片付けは学生同士が協力しておこなわれ、そのなかで自分の気に入った衣類を見つけて持ち帰る姿も見られた。

【ラボの運営の感想】

今回の取り組みを通じて、まだ十分に着用できる衣類や新品が不要品として集まっている現実を目の当たりにしたことで、学生たちのなかに、「廃棄する前に活用できるか考える」という新たな選択肢が生まれたのではないかと感じた。複数の大学の学生がラボに集まり、一つの机を囲むことで自然なコミュニケーションが生まれ、互いのアイデアや技術を認め合う場面が多く見られたことは、とても印象的だった。廃棄衣類と向き合い消費行動を振り返る視点と、ものづくりを通して大学間の交流を深める視点の双方から、UPCYCLE LABO の活動の意義を改めて強く実感した。

【活動の様子】



(文責：京都光華女子大学 キャリア形成学部キャリア形成学科4年 ラボ長 坂本遼香)

3.8 Mada ikeruyarn

3.8.1 趣旨

関西の学生によるアップサイクルマーケット Mada ikeruyarn は、複数の大学による合同チーム名として、2024 年に学生によって名付けられた。学生は、企業からご提供いただいた繊維廃材に触れ、見て、感じながら、繊維廃材がどのような活用可能性を秘めているのか、その続きを考え、製作・販売活動を行う。

本活動では、営利を目的とせず、販売におけるお客様との対話を通して、自作の製作品が消費者にどう評価されるのか直接に知る学びの機会として位置付けている。

3.8.2 作品

今回は、4 大学（京都光華女子大学・京都女子大学・成安造形大学・大阪樟蔭女子大学）・37 名の学生が参加した。

使用した素材は、11 種（蚊帳素材（有限会社 井上企画・幡）・古着（東谷商店）・靴下輪っか（岡本株式会社）・リボン（高島リボン株式会社）・カーペット素材（東リ株式会社）・カーテン素材（株式会社カズマ）・リボン（株式会社 SHINDO）・ミシン糸（株式会社フジックス）・再資源フェルト（株式会社 colourloop）・フサ耳（金井重要工業株式会社）・デニム素材（生機）（株式会社ジャパンブルー））、製品数は 81 点であった。

平均単価は、923 円であり、価格の範囲は、300 円から 3000 円となった。価格設定は、小物の大きさや素材の使用量、製作時間などを考慮し、製作者により設定された。

販売場所は、エスカレーター横の人の流れのある場所であり、上階から製作品を眺めることもできる立地であった。しかし、お客様の歩行速度は速く、目的の場所に向かって行き交う人の多い場所でもあった。

当日は、商業施設 BREEZE BREEZE の什器を使用させていただいたほか、各自、鏡や POP を配置するなど展示への工夫がみられた。このことは、製作をゴールとするものではなく、消費者にどう魅せるか伝えるかを意識したものであり、学生にとっては教室での学びでは得難い実践的な学びにつながった。また、販売空間は、製品を介したお客様や担当学生とのコミュニケーションの場として機能した。これまで製作にかけた時間や工夫し考えたことは自分や素材との対話の時間でもあったが、販売空間は、それをアウトプットする開かれた空間でもあったといえる。なお、今回の作品は資料 5 に纏められている。

（文責：谷明日香）



展示スペースの概要（付録 3 も参照ください）

3.9 Music Live

3.9.1 趣旨

今回は「実行委員の声」の筆者の項でも説明しているが、会場に大阪・西梅田の商業施設 BREEZE BREEZE を選んだ理由は、纖維リサイクル技術研究会の分科会の一つである纖維廃材から楽器を創造する Team の有志で結成された音楽バンド“Fiber Upcycle Band:通称 FUB)) が 3 月に大阪でイベントを開いた様子が某新聞に掲載されたものを、たまたま、BREEZE BREEZE 関係者が見られて、FUB と BREEZE BREEZE とで音楽イベントが出来ないかと言う問い合わせがきっかけになっている。とくに、この商業施設に入っている音楽教室である MIKI ミュージックサロンとのコラボが出来ないかと言うことであった。そこで色々議論した結果、MIKI ミュージックサロンから種々の楽器等をお借りして、我々が作成した楽器との音比べや、FUB の演奏をすることになった。開催当日は FUB メンバー 12 名全員が集合したが、商業施設に入っている、他の多くのテナントに迷惑をかけないようにドラム等の大きな音が出るものは使用禁止となり、少し、使用する楽器には工夫を必要としたが、メンバー全員で合奏することになった。廃材から作った楽器を学生諸君や来場者に披露することによって、纖維廃材の出口（可能性）の一端を伝えるとともに、音楽を通じて環境問題を考えることが出来ればと言う思いで開催した。

3.9.2 内容

Music Live はイベント二日目と三日目の 18:30 から、約 1 時間にわたって行われた。両日ともに、最初に分科会によって纖維廃材から試作された楽器の説明がなされるとともに、MIKI ミュージックサロンから提供された市販のカフオンやポンゴと分科会が作成した楽器の音比べも行った。

その後、FUB の演奏が行われた。曲目は「糸」と「明日があるさ」の 2 曲であった。2 曲目は会場 (BREEZE BREEZE) を管理されている株式会社 MSC の水野様がテナーサックス奏者として特別参加された。2 曲の終了後に期せずしてアンコールの要求があり、会場参加者全員が纖維廃材から試作された楽器を手に持って「明日があるさ」を合奏した。参加して頂いた学生諸君のノリが素晴らしい、会場が一体となって大いに盛り上がり、音楽のすばらしさを体感する一瞬であった。

二日目も同様にアンコールの要求があり、アンコールでは「風になりたい」の曲に合わせて FUB メンバーの田村有香先生の踊りも披露され、初日以上の盛り上がりを見せ、イベント最終日の締めとして素晴らしい時間となった。なお、分科会が制作中の種々の楽器については、別途報告書が作成されることになっている。





(文責：木村照夫)

3.10 提供廃材の物性評価

3.10.1 目的

「私たちの SDGs～繊維製品の循環をめざして～」では、例年、各大学において繊維廃材から衣装製作をしてファッションショー「廃材コレクション」を実施しているが、素材となる廃材がどのような特性を有しているのか、製作品が“リアルクローズ”として一般消費者の手に渡る“商品”として生まれ変わることにあたり、必要な消費性能(品質)を有しているかを確認することを目的に、素材の物性評価を行っている。

4回目となる今年、物性評価に供した廃材は、再生糸を原料とした繊維再資源シートを選定した。繊維再資源シートは、廃棄衣料を色ごとに分け、繊維を細かくほぐして熱可塑性樹脂と混ぜ合わせて加工した素材である(図1)。繊維と樹脂を組み合わせることで、布にはない独特的の手触りや質感、そしてしなやかな強度を備えており、使い込むほどに柔らかさや風合いが増し、経年変化を楽しみながら長く利用できることが見込まれる素材である。

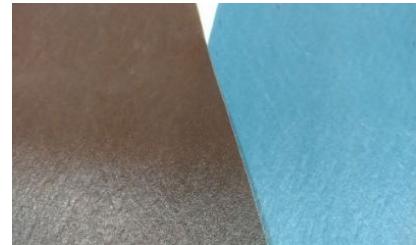


図1 再資源シート
(提供:株式会社 colourloop)

3.10.2 物性評価

物性評価は、素材の機械物性や耐洗濯性、染色堅牢度などを評価する「消費性能」と、手触りなど素材の特性を示す「風合い」の両面から試験を行った。

消費性能試験は、一般財団法人ボーケン品質評価機構大阪試験センターに協力を頂き、同センターで実施した。また、摩擦堅牢度ならびに洗濯堅牢度試験については、京都工芸繊維大学先端ファイブロ科学専攻奥林研究室にて実施した。

結果について、消費性能は一般的に要求される生地の品質性能をとりまとめたボーケン基準(繊維製品)生地・製品検査品質基準一覧表の婦人・子供服の判定基準をもとに、アパレル素材として用いる場合

表1 消費性能試験方法

試験項目		試験方法	判定(合格)基準
引張強さ		JIS L 1096 ストリップ法	200(N)
引裂強さ		JIS L 1096 ペンジュラム法	10(N)
寸法変化率	ドライ	JIS L 1096 J-1 法(タンブル)	±3(%)
剛軟性		JIS L 1096 45° カンチレバー法	—
染色堅牢度	摩擦	JIS L 0849 摩擦試験機II型	乾4(級) 湿2-3(級)
	耐光	JIS L 0842 第3露光法	4(級)
	ドライ	JIS L 0848 A-1 法(パークロ)	変退色4(級) 汚染3-4(級)
		JIS L 0848 B-1 法(石油)	同上
	汗	JIS L 0848	変退色4(級) 汚染3-4(級)

に必要な性能を満たしているか判断した。試験方法および判定基準を表1に示す。

一方の風合い評価試験については、神戸大学大学院人間発達環境学研究科井上研究室で測定を行った。カトーテック社製風合い試験機(KES FB シリーズ)を用いて計測した布の基本力学特性値(引張り、せん断、曲げ、圧縮、表面(摩擦・粗さ)、厚さ、重さ)から、KOSHI、HARI、SHARI、FUKURAMI、NUMERIの6つの風合い値を算出した。得られた風合い値については、標準的な婦人服地の値と比較して5段階で示した。

3.10.3 結果

消費性能結果を表2に示す。すべての項目において、一般財団法人ボーケン品質評価機構が示す婦人・子供服地に一般的に要求される品質性能(ボーケン品質基準)を満たしていた。シート素材で剛軟性が高く布のようなドレープ感はないが、素材強度、耐洗濯性、染色堅牢度について、アパレル素材として十分に使用できる風合いを示す結果となった。

表2 消費性能 (判定)

引張強さ		(N)	たて	470	○	
			よこ	200		
引裂強さ		(N)	たて	8.8	△	
			よこ	10.6		
寸法変化率	ドライ	(%)	たて	-0.7	○	
			よこ	-0.3		
剛軟性		(mm)	たて	150 以上	-	
			よこ	140		
染色堅牢度	摩擦	(級)	乾	5	○	
			湿	5		
	洗濯	(級)	変退色	5	○	
			変退色	4		
	ドライ (パークロ)	(級)	汚染	5	○	
			変退色	4-5		
	ドライ (石油)	(級)	汚染	5	○	
			酸性	3		
	耐光	(級)	酸性	5	○	
			アルカリ性	5		

※ - は基準無し

次に、風合い評価結果を表3に示す。

デザインにあたり着目した素材のしなやかな強度について、風合い評価結果では衣服にした際の動的な美しさや形態の保持性、動きやすさに影響するKOSHI感が大きい結果となった。また肌触りの良さを示すNUMERI感も大きな値を示し、布にはない独特の手触り感や経年変化を楽しむことが期待できる。

表3 風合い評価結果

基本力学特性値		不織布素材の特性					
		風合い等	かなり 大	大	標準	小	かなり 小
EMT	(%)	1.225					
LT	(-)	1.057	○				
WT	(gfcm/c m ²)	3.245				○	
RT	(%)	54.333			○		
B	(gf·c m ² /cm)	28.920			○		
2HB	(gf·cm/cm)	10.971			○		
G	(gf/cm·deg.)	184.208			○		
2HG	(gf/cm)	98.868					
2HG5	(gf/cm)	94.888					
LC	(-)	0.829					
WC	(gf·cm/c m ²)	0.151					
RC	(%)	75.700					
MIU	(-)	0.335					
MMD	(-)	0.024					
SMD	(mm)	3.040					
T	(mm)	0.806					
W	(mg/cm ²)	57.325					

3.10.4 まとめ

以上のように、消費性能、風合いとともに日常の使用においても維持することができるとともに、アパレル素材としての利用が可能であると判断できる結果となった。

(文責：三宅 肇)

4. 総括

4.1 実行委員の声

4.1.1 宮原佑貴子 実行委員長：

今年も、本イベントの実行委員として「私たちの SDGs2025～繊維製品の循環をめざして～」に携わることができ、大変光栄に思っております。

実行委員長として関わらせていただく中で、至らない点も多くありましたが、皆様のご協力に支えられ、無事に本イベントを開催できたことに心より感謝申し上げます。

私自身、会場で参加学生や来場者、企業・団体の皆様が一堂に会する現場に立ち会うことで、多くの学びと感動を得ることができました。

今年初めて実施した3つのコンテンツである、(一社) Textile Circular Networkとのコラボレーションによる衣類回収 MEGURUFUKU プロジェクト、そこで回収した衣類を用いた UPCYCLE LABO、そして Fiber Upcycle Band (FUB) と MIKI ミュージックサロンのコラボレーションによる繊維廃材から生まれた楽器を使った演奏会は、単なる活動やパフォーマンスに留まらず、参加者同士の交流が自然に生まれ、活気あふれる場となりました。例えば衣類回収では、まだ十分に着用できるものや新品でありますながら不要とされる衣類の多さに驚きと発見の声が聞こえてきました。そして隣接する UPCYCLE LABO からは、「この組み合わせで着たら可愛くない？」「2着の服を切ってつなげて鞄を作ってみたい！」「ええやん！」などの明るく楽しげな声が聞こえ、大学間の自然な交流が生まれていました。後半2日間の最終プログラムとして行った FUB の演奏会では、来場者が輪になって繊維廃材から生まれた楽器を演奏し、会場全体が一体となるエネルギーに包まれました。学生を中心に、企業の方、先生方がともに楽しむ空間には準備段階では想像にも及ばなかった臨場感があり、まさに唯一無二の体験でした。

これまでを引き継ぐコンテンツにも新たな発展が見られました。今回、初めての開催となる会場は、1階から6階まで吹き抜けがあり、外光が注ぐ非常に開放的な空間でした。そこに佐々木先生の手腕が加わり、独自の空間演出が実現しました。吹き抜けを貫くワイヤーで展示什器を吊り下げることで、ユニークでありながら自然な配置となり、まとまりを保ちながらもブースごとの区切りを感じられる設計になっています。

吹き抜けの上から来場者や参加者の様子を見下ろすと、全く規則的ではない動線で人々が行き交っていることに気づきました。多様な立場や考え方を持つ人々が、それぞれ自由に動き、交流し、発見を重ねる様子は、まさに本イベントを象徴しているかのようでした。ファッションショーや展示の合間に生まれる会話や笑顔、そして自然な動きの中での出会い、時に生まれる緊張感が、空間全体を活気あるものにしていました。

こうした自然の中で行うファッションショーは、田中先生の柔軟なアイデアによって、展示空間を抜けて大通りへとつながるような演出が加えられました。繊維廃材から生まれた衣服をまとい、街中を軽やかに歩く姿が目に浮かぶようでした。

3日間のイベントを振り返り、改めてエンウィクルの一員として、これから何ができるのかを深く考える機会となりました。

繊維製品のゼロ・エミッションは決して容易なことではありません。だからこそ、こうした機会を通して、これまで築かれてきた繊維産業の技術や知恵への理解を深め、学生たちとともに、持続可能な繊維製品の未来を考え続けていきたいと思っています。

4.1.2 三宅 肇 副実行委員長：

「私たちの SDGs2025」では、昨年に引き続き副実行委員を務めさせていただきました。

4回目の開催となる今年度は、繊維製品の循環を自分事として捉えるという主旨は変えずに新たなプログラムを加えるなど、これまで以上に充実した開催内容になったと思っています。

複数の大学から 100 名を超える学生が集まると、会場のどこかで常に気づきや学び、出会いや交流が生まれるもので、参加学生にとっては大学内では得られない多くの学びができたものと思われます。

本学(甲南女子大学)からは衣生活を学ぶ3年生 20 名が廃材コレクションの企画、製作を行いました。4月にイベントに向けた話し合いを始めたころは、正直なところ“やらされ感”を持つ学生がいたことは否めませんが、衣装製作の中盤からはすべての学生が何らかの役割をもち、自主的に作業日程を確保して最後までやり遂げたことは、指導教員として大変うれしいことでした。学生たちには、イベントの主旨や目的、日程など最低限の情報を明確に伝えるだけで、その意図を理解して自ら考えて行動していくことができるのだということを実感しました。

参加学生同様にわれわれ実行委員もたくさんの学びや経験をさせて頂きました。参加者およびご協力いただいたすべての皆様に心より感謝するとともに、来年度に向けて全力を尽くしていきたいと思います。

4.1.3 與倉弘子 実行委員：

日本繊維機械学会フェロー会、同学会繊維リサイクル技術研究会のメンバーとして、「私たちの SDGs」の活動に参加しています。滋賀大学における古着の回収、繊維廃材の物性評価の補助やイベント当日の活動支援を担当しました。

企業・学生企画のワークショップや講演会に一般参加者と一緒に参加して、円滑な運営を支援することが出来たと思います。これまでの京都文化博物館での開催と今回の大坂梅田開催では雰囲気・来場者層が大きく異なり、今後のイベント開催に向けて有意義な知見が得られたと思います。この経験を活かして、繊維製品の循環を目指した「私たちの SDGs」の輪を広げていただければ幸いです。多くの皆様とご一緒に活動することが出来て、とても楽しかったです。ありがとうございました。

4.1.4 井上真理 実行委員：

今回のエンウィクルのイベントでは、KES を用いて、昨年の 4 種類の布地の風合い特性を測定した結果との比較として、廃棄衣料から得られた繊維と樹脂の複合したシート状の材料の特性と風合いについて神戸大学の学生が発表した。これまでの布地は、不織布、風呂敷、カーテン生地 2 種といった布であるが、今回は硬い材料であったので、曲げ特性やせん断特性は測定に工夫が必要であった。一般的な布地に比べて、剛性が高いことが特徴であるため、どのようにデザインするのか興味があったが、硬いからこそ形が定まり、大きなフリルのように見せたデザインになっていて、とてもおしゃれな使い方をしていると感心した。

神戸大学の学生は、イベントの準備にはほとんど参加できていないが、当日の発表や司会等で、関わらせていただき、感謝している。自分たちの研究で風合い特性について研究しているが、その素材が実際の衣服上でどのようにデザインされるか、というところをじかに見ることはあまりなかっただろうし、またあのような公の場で発表するということも貴重な経験であったと思う。

今回は、FUB の一員としても参加させていただき、多くの学生さんが一緒に音楽を楽しむという経験もさせていただいた。廃材から作った楽器をみんなが持つて、一体となって音楽を奏でるという経験をさせていただき、このような機会をつくっていただいた先生方に感謝申し上げる。

大阪梅田の吹き抜けのビル内で、このようなイベントに参加させていただいたことにも改めて感謝申し上げる。学生さんたちが生き生きとしていて、私自身も元気をもらうことができた。

4.1.5 成実弘至 実行委員：

私は今回、京都女子大学自主サークル KUMO が参加するので大学側の窓口として実行委員に加えていただいた。私自身はこのイベントに主体的に関わったとは言えないし、貢献度も低く、どちらかというとオブザーバーであったように思う。そのような立場から、熱意をもって動かれてきた主催者の方々に敬意の念を表したいと思うし、京女の学生たちにいい機会、いい刺激を与えていただいたことに感謝している。

私は長年サステナブルファッションのイベントを見たり、関わったりしてきた。その上で、今回の催しを振り返ると、「まだこういうイベントなのか」という既視感を覚えたというのが率直な感想である。「こういうイベント」というのは、ファッションの環境問題を学生や来場者に啓蒙することを目的としたイベントという意味である。もちろん繰り返しこういうイベントを行うことは大切なことかもしれない。しかし、そろそろ啓蒙だけでなく、もう少し具体的な解決策を提示する段階にステップアップすべきではないかとも思う。ファッションショー、ワークショップ、販売などにより、服への意識が変わった人もいたかもしれないが（あまり人がこないような会場だから、集客できていなかったように見えたが、関係者以外にどれくらいの人を巻き込んだのか）、完成度の低い「リメイク品」を販売したり、だれに向いているのかよくわからないファッションショーをおこなうことが、「循環型社会に向けての課題解決」になっていたのか、正直よくわからない。各大学から来た学生たちもレベルも意識も様々で、問題意識を持って来ているのか、先生に言われて参加しているのか、よくわからなかつた。総体的に見て、本イベントが何を目的としていたのか、何を達成したのか、私にはよくわからなかつた。

私が一番疑問に思ったのは、今回大学や関係者からかなりの繊維製品を集めたはずだが、これをだれがどのように再利用するのか、今後再利用するあてはあるのか、提供してくれた方々に説明責任を果たしているのか、という点だ。今回のような展示で、なにかがなされたとも思えないし、提供者にも来場者にも（あるいは主催者にも？）集めた繊維によって何をするのか、わかつていなかつたのではないか。イベントのにぎやかで衣料品を集めても問題は解決しない。

すべてのプロセスを見ているわけではないので、無責任なコメントになっているのかもしれない。しかし、循環型社会への展開にむけて、参加者がなにを果たしたのか、なにを果たしていないのか、きちんと総括し、今後どう活かしていくかを考えることがなによりも重要なのではないだろうか。

4.1.6 小野寺美和 実行委員：

本学では、「私たちの SDGs2025」プロジェクトの一環として、企業より提供された生地や廃材を活用し、学生と協働して新たな衣服の創製に取り組んだ。本活動は、持続可能な社会の構築に向けた実践的な教育の場であり、ファッションを媒介として環境問題や資源循環の重要性を考察する貴重な機会となった。

提供された素材の中には、加工が困難な特殊生地や、用途が限定される廃材も多数含まれていた。

しかし、学生たちはそれらの制約を創意工夫によって乗り越え、女子大学生ならではの感性と柔軟な発想を活かし、独創的な衣服を次々と創製した。色彩や形状、素材の質感を丁寧に分析し、社会的メッセージを内包したデザインへと昇華させる姿は、指導者として非常に頼もしく感じられた。

製作過程においては、素材選定後のデザイン、縫製、発表に至るまで学生主体で進行し、協働力や課題解決能力が着実に育まれた。また、衣服ロスや大量生産・大量廃棄の現状を学ぶ中で、ファッション産業が抱える構造的課題を身近に捉える学生も多く、環境配慮や社会的責任に対する意識の深化が見られた。

本取り組みを契機として、教育の力が社会課題の解決に寄与し得ることを改めて実感した。

学生たちの創造力と行動力は、未来社会を切り拓く可能性に満ちており、彼女たちが今後社会において持続可能な価値を創出していくことを期待している。

今後も、教育現場から SDGs 達成に向けた取り組みを継続し、地域・企業との連携を深化させながら、より実践的かつ社会的意義のある学びを提供していきたい。

4.1.7 森下あおい 実行委員：

今年度のエンウイクルの活動には、服飾制作としては本学学生が参加はせず、イベント期間に現地にて展示作品やファッションショーを見せていただきました。まず学生に皆さんのが廃材から作ったアップサイクルの作品が、明るく軽やかな印象の店舗空間に自然に溶け込み、過去、3回行われた企画とは異なった活き活きとした新鮮さを強く感じました。ファッションショーにおいても、モデルが展示ラックの間から登場する演出により、観客にモデルの表情までが伝わっていたことがとても良かったと思います。学生の皆さんの感想では、さまざまな大学生が作った制作物の面白さや造形への刺激を受けたことについて触れている人が多く、これは過去の開催での感想と同様に、エンウイクルの活動が如何にひとつの大学だけではできない経験であるとあらためて痛感しました。

一つのエピソードですが、過去にエンウイクルの活動に参加した学生から、素材や場所を提供していただいた企業との出会いや、一緒に取り組んだ他大学の学生の皆さんとの出会いは、纖維廃材の課題を考えるという同じ目標で現実の場を持ったことで、イベントが終わってから、自分の考え方方が大きく変わったという話を聞きました。

古着の廃棄や纖維廃材がもたらしている社会課題を多くの一般の方へ知ってもらうことから始まったエンウイクルの廃材を基にした制作や発表は、開催する場所や参加大学の取り組み企画によりまだ新しい展開ができると思います。今年度に参加された学生の皆さんにとって、この経験が新しいステップになることを期待したいと思います。

4.1.8 西 晃平 実行委員：

今年度で4回目の開催となる「私たちのSDGs」イベントには、四天王寺大学短期大学部としても4度目の参加となります。本学からは、1年生と2年生の学生が参加し、1年生は古着や廃棄される繊維製品を利用して裂き織りのワークショップに取り組み、2年生は川村ゼミの活動の一環でファッショショナーに出展するための衣服を制作しました。

学生達からは、イベント中にさまざまな人に関われて楽しかった、話を聞いた時から参加したいと思っていたなどの感想が挙がりました。

本学では、学生の課外活動として本イベントをたびたびオープンキャンパスや初年次教育科目で紹介しており、そのたびに高校生や大学生からの関心の高さを強く感じます。本イベントは、大学生による廃材の利活用を踏まえた製品発表や、企業・研究者による繊維製品の消費に関する啓発活動を主な内容としています。しかし、イベントに関する発表の場で見られる高校生や学生のまなざしからは、楽しそうや、関わってみたいといった、心が躍るような魅力的なものに映っていることが伝わってきます。サステナビリティという言葉や意義を分かりやすく伝えることは容易ではなく、ましてや実践へつなげることはさらに難しい課題だと思います。このようなイベントに参加することによって、楽しみながら自然にサステナビリティに取り組み、その過程で必要性や、言葉の概念を学ぶことができるので教育上、非常に貴重な機会である感じます。

このようにイベントとしても魅力に溢れ、加えて充実した学びの機会提供の場として「私たちのSDGs」が実現しているのは、実行委員長の宮原先生、実行副委員長の三宅先生、そして統括の木村先生をはじめ、実行委員の先生方が情熱を注いでイベントを継続的にアップデートし、魅力的なコンテンツを作り上げてくださっているおかげだと思っています。多くの企画においても専門分野の異なる先生方が連携し、協働する体制には毎回のことながら深い感銘を受けています。

今年度も、このような素晴らしい体験の機会を私個人にとっても学生にとってもご提供いただき、関係者の皆様へ心より感謝申し上げます。

..

4.1.9 川村朱乃 実行委員：

このたびは、「私たちの SDGs2025～繊維製品の循環をめざして～」に初めて参加させていただき、誠にありがとうございました。参加していた先生方の熱意と、数々の企画力に圧倒され、そこに加わることができたことを大変光栄に思います。学生たちと共に学びの場を共有できたことに、心から感謝申し上げます。

今回のイベントは、学生にとって「服の廃棄」という課題を改めて見直す大切な機会となると同時に、他大学の作品や取り組みに触れ、互いに刺激を受けながら高め合う場となりました。普段はそれぞれの大学で完結しがちな活動が、交流を通じて新たな学びに発展していったことに、大きな意味を感じています。

また、梅田のオフィスビルという、学生にとって普段踏み込むことのない場所での開催は、新鮮な経験となりました。行き交う人々の多くは大学という教育現場とは異なる背景を持つ人々であり、学生にとっては自分の活動をどのように伝えれば届くのかを考えるきっかけとなりました。実際に来場者との対話を重ねる中で、自らの言葉を選び、表現を工夫していく姿が見られ、その経験は教育を超えた実践的な学びにつながったと感じます。

さらに印象的だったのは、イベントそのものが「育っていく場」として存在していたことです。ラボで出来上がっていく服たちが少しずつ会場に加わり、日を追うごとに空間が充実していく。展示が完成形として提示されるのではなく、生成過程そのものが可視化され、来場者もまたその変化を体感することができた点に、イベントの新しさと豊かさを感じました。加えて、企業の協力や講演なども盛り込まれたことで、イベントは単なる学生発表の場にとどまらず、「作る・学ぶ・楽しむ・伝える」という多面的な側面が一つの空間で循環する貴重な機会となりました。制作を通じて学びを深め、その学びを楽しみながら他者に伝えていく。このプロセスの中で、教育と社会が交差し、新たな価値が育まれていたと感じます。

学生たちは多様な刺激を受け、主体的に生き生きと活動していました。その姿は、私自身にとっても大きな学びであり、教育のあり方を見直すきっかけとなりました。教員が場をひらき、学生がその中で自らの表現を深めていくことの意義を、改めて強く実感することができました。

末筆ではございますが、実行委員の先生方、関係者の方々、改めまして謝辞を申し上げます。今後もこのような取り組みを通じて、多様な人々の意識を動かし、健やかなファッションの未来を学生と共に模索していきたいと考えています。

4.1.10 中村真悟 実行委員：

今回で立命館大学からの参加は3回目でした。初回はアンケート作成、分析への参加、2回目はワークショップのみでしたが、今回は企画のコンセプトの議論から当日に至るまで参加させていただきました。

とくに今回はupcyclelabでの制作、ファッショショの参加も含め参加学生の関わりが多かったこともあり、また他大学の学生からの刺激を多くうけることができたようで、来年度はより作る側で参加したい、という積極的な発言が学生からありました。

私の方は服飾、デザインの専門性はないため、どちらかといえば目的と活動の関係、参加学生にとってのメリットを意識しながら参加させていただきました。当日に至るまでの過程については理解が及んでいない点も多くありますが、講演企画、upcycle labなど、主催する学生にとって発見、成長の機会は多いと感じております。その点で、以前のファッショショを中心にはじめている学生とのズレはあったかもしれません。このあたりはエンウィクルの裾野の広さではないかとも思います。

参加学生が多くなるほど、個人としての目的意識と全体の目的とのバランスは難しくなります。次年度実施の際には、適宜イベントなどをいれつつ学生同士のリアルなコミュニケーション(キックオフイベントなど)があってもよいかな、と感じております。場合によっては参加大学でのミニイベントの実施などもありかもしれません。

いずれにせよ、継続し活動の活性化の現れだと思います。立命館では活動の発足当日から、学内で集めた古着をリメイクし、学内外に還元するという循環、サステナブルファッショ、を目指して活動しています。定義もさることながら、それをどのように取り組むのかは実践、経験、交流がとても大事だと考えております。その点でエンウィクルという存在は大変貴重で、今後とも積極的に関わっていきたいと考えております。

4.1.11 木村照夫 実行委員：

「私たちの SDGs」イベントも今年度で 4 回目を迎えた。このイベントは筆者が 2021 年に東京有楽町マルイデパートのエシカルをテーマとするフロアで、ひょんなことからフロア責任者と出会い、デパートと大学とがコラボして環境に関する事業ができないか、との先方からの相談（雑談）がきっかけになって始まった。また、今回は大阪・西梅田の商業施設 BREEZE BREEZE で開催したが、開催場所を選んだ理由は、繊維リサイクル技術研究会の分科会の一つである繊維廃材から楽器を創造する Team (Fiber Upcycle Band) が 3 月に大阪でイベントを開いた様子が某新聞に掲載されたものを、たまたま、BREEZE BREEZE 関係者が見られて、FUB と BREEZE BREEZE とで音楽イベントが出来ないかと言う問い合わせがきっかけになっている。我々の Team 名であるエンウィクルが示している縁（エン）の大事さ、面白さをつくづく考えさせる。

内容は年々バージョンアップし、参加学生も年々増加し、4 年間でトータル約 400 名の学生が参加したことになる。このように学生の参加者が増えているのは実行委員の各先生方の熱意と指導の賜物であるが、学生諸君の環境への関心度が増していることを物語っていると思う。本報告書を見て頂くとわかるように、本イベントではファッションショーやワークショップなど多くのアイテムがあったが、それぞれのアイテムにおいて担当学生が熱心に取り組む姿には感激とともに本イベントの開催が無駄ではないと安堵しているのは他の実行委員の方々も同様かと思われる。

さて、Team のテーマである繊維製品の循環を目指す場合、古着の効率的な回収が非常に重要であり、回収システムの構築は環境省／経産省の 2030 年に向けての大きな課題となっている。しかし、ただ回収するだけでは意味がなく、いかに古着を資源として循環させるかが非常に重要である。そこで、今回のイベントでは新たな試みとして古着回収のアイテムを付け加えて、どのような服が捨てられているのかを知るとともに学生諸君が主体となって回収した古着を資源化するにはどうすれば良いかを考える機会とした。詳細は本報告書の 3.7 にまとめられているので一読して頂けると幸いである。

また、今回の新たなアイテムとして廃棄繊維を用いて制作した楽器の披露も兼ねて FUB の協力を得て、音楽イベントも行った。このイベントを行うきっかけは、当初の BREEZE BREEZE 側の希望が音楽イベントの開催であったからであるが、FUB としては他人に聴かせるような腕前でないことから演奏主体ではなく、繊維廃材の楽器作りの素材としての可能性を参加者全員で考える機会になればと思い参加した。しかし、イベントの最後では参加者全員が繊維廃材をベースにした楽器を取り、FUB メンバーと一緒に大合奏になり、立場の異なる様々な人々が一体感を生むことができる音楽のすばらしさを改めて感じた一瞬であった。

このように、今回のイベントも非常に楽しく有意義なものであったが、企画したイベントがどの程度社会課題に貢献しているか、開催したイベントを今後どのように発展させるか、非常に重要かつ難しい課題である。本イベントは学生諸君が繊維製品の循環について自分事として考えるきっかけになればとの思いから始めたものであり、すぐに結果は出なくとも、今回の経験が少しでも学生諸君の将来の社会生活に活かされれば幸いであると思っている。

色々課題はあるものの、実行委員の皆様と内容を吟味しながら来年も是非とも継続して開催したいと思っている。継続は力である。

4.1.12 佐々木一泰 実行委員：

別項でイベント空間の考え方で述べさせて頂いた通り、さまざまな先生方や学生、会場のサポートが無ければ実現できなかったデザインができました。深く感謝申し上げます。さて、昨年度、先生方がイベントの後の反省点を踏まえ、今回、空間デザイン面と運営ミーティングでは、明快な動線計画と、学生がまとまる場所という観点から提案をさせていただきました。実はあの空間でこれまでファッショントークは何度か行われていたようですが、装飾された壁面の空間を中心に組み立てられていたらしく、今回のようなレイアウトは初めての試みだったようです。ある先生から、もし自分たちがレイアウトを行っていたらどうなっていたか、というお話がありましたが、既存の平面計画を参考にしながら、細かく分かれたレイアウトになっていたかもしれません。それでも空間は使用できるので、美しいかどうかは分かりませんが、ある程度は使えていたのではないかと思います。どんな分野でも形にすることは出来ますが、何を目指し、どう実現するのかを具体的に現していく際に専門性が求められる。それは様々な分野でも同じことがいえるかもしれません。

私自身は日本繊維機械学会には所属しておりませんが、本学の森下先生からお声掛けを頂いてから参加し、毎回、学生に様々な刺激が与えられる場と重宝しています。今回、滋賀県立大学からは服の出展はありませんでしたが、こういった機会で学生が関わったのは良かったことだと思います。ただ課題点として、本学の学生が、分野が異なるなかでも、もっと他大学の学生とも関わいたら良かったのではないかと考えています。実際廃棄の問題は様々な分野でも関わる可能性がある課題です。この場は多分野交流の可能性を持っているとも考えられ、広報面やプログラム面からも交流の活発化の可能性があります。

先日、とある自治体の方から、廃棄家具の活用についての相談がありました。様々なアイデアは既存の取り組みから取り入れることは可能ですが、やはり最後に立ちはだかるのは、販売や流通、在庫の課題です。学会や大学の弱点のひとつに社会への実装の課題があります。しかしオランダにいる知人の言葉に勇気づけられたことがあります。それは、我々は間違なく生態系のバランスの中で生きていること。世界中の人々の行動の一つ一つが世界の将来を決めていること。確かに我々は何気ない暮らしの中で生態系に働きかけることが出来る。それぞれが自分に出来ることを模索する、そんな可能性がある場だと思っています。

実際、私自身は意識が高いわけでは無い惰性に生きる人間ですが、昨年から展示デザインに関しては、ほぼ廃棄物ゼロが実現出来たのは、このイベントに参加するようになってからだと思います。例えば使用している材料はポプラ LVL であり、これを研磨し使用しています。これは挿し木植林が可能であり、展示後はそのまま別材料への転用が容易です。

最近、年齢のせいなのか、市場の変化なのか、今までの服を買うという行為もかなり変化しデザインの変化も感じます。デザインが出来ることのひとつに、クールでポップな表現で、課題を豊かに伝える機能があります。その根源にはコミュニケーションがあり、さまざまな活発化に期待しています。

4.1.13 谷 明日香 実行委員：

「ごみ」とはなにか。「ごみ」の語源を調べてみると、古くは「ご」は落ち葉を意味しており、落ち葉がやがて腐葉土となって芽を出し、「実（み）」になることから「ごみ」となったという説がある。この説によれば、「ごみ」という語は、命の循環や再生という肯定的な側面が含まれており、現在一般に想起される否定的な意味とは異なる起源をもつようだ。

私は、「私たちの SDGs」に参加して4年目になる。活動を継続する中で、「古着はごみなのか」「リメイクしてごみをつくっているのか」といった問いに直面するようになった。語源の視点から見れば、「ごみ」は単なる不要物ではなく、新たな命や価値を生む可能性をもつ存在でもある。

関西の学生によるアップサイクルマーケット「Mada ikeruyarn」では、学生たちが纖維廃材を活用して小物などを製作・販売している。しかし、限られた販売期間で全てを売り切ることは容易ではなく、年々売れ残りの製作品が蓄積しているのが現状である。この状況は「ごみ」なのだろうか。

纖維廃材をアップサイクルする過程は、「ごみ」から新たな価値を生み出す創造的行為であり、「ごみ」という名の“実り”を感じさせる。しかし、製作時に生じる端材や売れ残りの存在を前にすると、それらが再び“ごみ”に戻ってしまうようにも感じる。私たちは、今、その現実に目を向け、次の一步を考える時期にきているのだと思う。

その答えの1つの方向性として、コンセプトの明確化なのではないかと考える。単に作って終わるのではなく、「誰のために、どのように使ってもらいたいのか」といったストーリーを考え、魅せること、伝えることが重要だ。Mada ikeruyarn の販売活動は、こうした表現とコミュニケーションの実践の場としての意義をもつと感じている。

もちろん、ゼロから新しいものを生み出すことは容易ではない。デザインを考える際、購入者の顔を想像することも1つのヒントになるのではないか。また、纖維廃材にもそれぞれの特徴がある。纖維廃材のそれぞれの資材としての特徴を活かした製作を通して、購入者と素材、そして作り手の思いをつなぐことができる。そのつながりがストーリーとなり、人の心に共感や共鳴をうむと同時に、製作品のコンセプトをより明確にしていくことにつながるのではないかと思う。

20年ほど前のことになるが、織物の組織について2週間ほど泊まり込みで熟練の方に学びに行ったことがある。その方は、制作の段階で出る短い糸屑を全て残し、糸を束ねるときに活用したり、糸から新たなものを創造し生活の中で自然と活用していた。私がある質問をした際に資料をくださった時には、使用済みの封筒の一端をカットし、裏返しにして形を整え、中身が少し見えるようなデザインカットを入れてオリジナルのクリアファイルのようなものに仕上げ、資料を挟んでくださった。私には発想もしなかったその工夫を見た時（とても素敵なデザインだった）、自分がモノのある時代に育った人間であることを自覚した。

今、時代は、経済重視型から環境重視型へと変化しつつある。今後は、纖維廃材を「ごみ」ではなく「資源」として捉え直し、過去に学びながら新しい時代を生きる学生とともに未来の新しい形を探っていきたいと思う。

4.1.14 奥林里子 実行委員：

昨年と同様、今回も物性評価の一部を担当させていただきました。対象材料は昨年とは異なり、反毛した故繊維と樹脂と複合したもので、見た目は革のような、フィルムのような材料でした。測定は研究室修士2年生の多根井克生さんにお願いしましたが、彼とこれまでとは異なる新しい材料を繊維のJIS規格で評価して良いか悩んだことを憶えています。繊維のリサイクル品を評価するには、新しい観念、システムが必要であることを学生とともに実感した瞬間でした。しかし、現在のところリサイクル品専用の規格はなく、学生と話し合い、「衣服」として使用する限り繊維として評価すればよいのではと結論付け、JIS Lの規格で試験を実施しました。結果、洗濯と摩擦については丈夫な染色であることが分かりましたが、結果については、二人とも少しモヤモヤとするものが残ったのが正直な感想でした。実はこのモヤモヤとする違和感が次の「新しい」を生み出すことに重要で、この違和感を無くすために次の手を考える、それが進歩だと思っています。今回の評価に携わった学生にも、新しいモノに関わる楽しさ、難しさを知ってもらえたのではと思います。

今回の新しい企画「古着回収」にも、研究室で取組ませて頂きました。今年度より研究室の研究課題に、故繊維からの糸製造を含めていますが、担当学生がゼミで実験結果を発表した後の古着回収ということで、多くの学生が興味を持って協力してくれました。後援団体として、本学繊維科学センターのスタッフにも協力を仰ぎ、合計16kgの古着を寄付させて頂きました。今回の取組みは、「私たちのSDGs」に直接関係しない方々にも、古着回収がどのように実施されているかの一端を、経験して頂けたと思っています。

「私たちのSDGs」では、アップサイクルの企画や制作、紹介にとどまらず、関連する様々な規格を考えていくプラットフォームになれる可能性を秘めています。また、開催当日だけでなく、準備の過程でも多くの方々にSDGsを体感いただけるイベントです。このように、色々な可能性がある「私たちのSDGs」に、本学が引き続き貢献できれば嬉しいです。

4.1.15 桂 阿子 実行委員：

今年度、本学からは1~4年生の有志15名がファッショショーンショーとアップサイクル作品の制作・販売部門に参加しました。参加者の全員は、古着や廃材のアップサイクルを軸として活動する京都女子大学生活造形学科所属の学生団体「KUMO」のメンバーであり、昨年度よりその活動の一部として「私たちのSDGs」への参加が定着しつつあります。上級生やイベント参加経験者が自主的にリーダーの役割を担い、メンバーの募集から準備期間を経てイベント当日まで、ほとんど学生が自走する形でやり遂げることができました。この経験を後輩が引継ぎ、次の代へ活動が繋がっていくことを期待したいです

4.1.16 田中秀彦 実行委員：

このイベントのファッションショーに携わらせていただき3年目になりましたが、毎年規模が大きくなり参加する学生数、ご来場になるお客様の数と層、お集まりいただく関係者や研究者の先生方の多様性と拡がりに、学生と共に学ぶことばかりで貴重な経験に感謝しかありません。会場とその構成のアイデアも毎年違うので、ファッションショーも柔軟な発想で学生と一緒に構築するのが楽しく、観客の皆様にもそこを含めて楽しんでいただけたのであれば大変嬉しいです。

繊維やアパレル生産の問題やアップサイクルという問題に、学生が一点一点ハンドメイドで制作した衣服の作品を発信する機会があることは、とても貴重なことだと思います。制作した本人やその友人が、自分の持っているお気に入りの服に重ね着をしてスタイリングすることで、その世代の感覚をダイレクトに表現しました。それにより、リアリティーを感じさせるデイリーウェアとして感じていただける演出が可能になりました。アップサイクルが日常を飾るファッションとして提案できることを、学生たちが身を持って表現するショーは、新しいスタイルのファッションショーとしての提案性も高いと思います。

また、今回は成安造形大学から初めて販売企画にも参加させていただきました。スケジュールの都合上、1日しか参加できませんでしたが、通りがかりのお客様にご購入いただけたことで、学生の手によるアップサイクル作品をお求めいただき日常でご使用いただけることを、お顔の見えるお客様に手渡しで販売できたことは大切な体験になったと思います。

さらに、学生同士によるアップサイクルの取り組みを紹介し合う発表時間や、企業の繊維問題担当者の方の発表の司会を務めさせていただける企画は、担当した学生にとって、重要な振り返りの時間となり、また他大学学生がどのような視点と技術で、繊維問題に向き合っているかを学ぶこととなりました。そして、大阪ブリーゼブリーゼという、中心地に位置するファッションビルの一階という情報が行き交う空間で、三日間に渡り開催できること、その場所をユニークな空間設計で来場者の方々に、学生作品と取り組みをご覧いただけたことは、とても有意義で珍しい実施例を提示したことにもなったと思います。

全面的にご協力いただいた施設の管理担当の皆様、大学教職員の皆様、ご講演いただいた企業・研究者の皆様、参加してくれた学生諸君、ご来場いただいたすべてのお客様に心から感謝いたします。

4.2 学生の声

参加学生は、3日間にわたるイベントで、ファッションショー、作品展示、トークショー、ワークショップ、アップサイクルラボなど、多様なコンテンツに参加した。なかでも今回初めて実施した衣類回収とアップサイクルラボでは、回収された衣類の中にまだ十分に着用できるものが多くあること、また、少しの工夫や手を加えることで新たな魅力を生み出せることを実感する様子が見られた。また、ファッションショーでは他学のデザインやアイデアに触れ、多くの刺激を受けた様子であった。以下に、イベント後に実施したアンケートの自由記述欄から、参加学生の感想を抜粋して紹介する。

(文責/データ整理:宮原佑貴子)

12. ファッションショーに取り組んだ人は、感想（大変だったこと、良かったことなど）を自由に記述してください。

■ 本当にその場その場で決まって言って、正しいのかわからなく、本当に自由で難しかったです
■ 人に何かを伝えられる作品を届けることの難しさ。
■ はじめて自分で服を作ってそれを自分で着ることができてとても良い経験になりました。たくさん手伝ってもらったけど、自分が考えた服を自由に作れるおもしろさを知りました。
■ 日常着というテーマに沿った演出のファッションショーができてよかったです。
■ ファッションショーの終わりには沢山の方々とコミュニケーションを取れたことがよかったです。
■ 服作りの難しさをしました。デザインを考えても、具現化することはとても大変です。でも完成させて着た時の達成感と嬉しさはとても大きいです。
■ 全員が堂々と衣装を皆様に披露していてとても楽しかったです！
■ 私は今回のファッションショーに先輩の衣装を着て参加させていただき、とても楽しくたくさんのお他大学さんの衣装も見ることができて勉強になるイベントでした。でも私が着るものとして作られた服ではなかったのでサイズや着こなし方が難しく少し苦戦したので、来年は自分で作った自分の好きな衣装でぜひ参加したいです！
■ 他の大学の方の制作物を見て、とても刺激を受けました。また、モデルが互いに着用しているものについて、制作方法を聞いたり、使用している素材を聞いたりして、コミュニケーションを取ることが多く、すごく良かったです。
■ 普段イメージしているファッションショーとは違って、好きなタイミングでポーズを取ったり、最初にお客様の前で衣装を着用したりと、これまでにない形だったから最初は不安もあった。けれど、終わったあとには大きな達成感があり、心から楽しめたと実感できた。
■ はじめてでしたので緊張しましたが、いい経験になりました。ファッションショーの衣装をみて感動しました。
■ リボン素材で作る時に固さやリボンの幅も考えながらデザインに落とし込んでいくことがむずかしかった
■ ランウェイでは人目があるので、どこに意識を向けたら良いか難しかった。他の大学のファッションスタイルを間近に見られて良かった。
■ 作り上げた物が動いているのを見てとても楽しかったです。人が着られる状態になっていてとてもよかったです。
■ デザインやテイストが幅広く、自分のデザインの幅も広がったように感じました。製作において困った事は、他の方々がどのくらいの装飾感の衣装を作るのか、を掴みにくかった事です。
■ 制作には時間がかかる大変だったのですが、他大学の方の作品を見て学ぶことが多かったです。
■ 自由に歩いてポージングが普段したことないから、難しかった。他の大学の服のデザインや演出に圧倒された。
■ ファッションショーということで、多くの人から評価をされる、衣装を見られる場である為、ステージ上で輝けるようなデザ

イン、また細かい部分までこだわったこと。

- 素材から普段使いできるような服にするために、デザインから決めるのが大変でも楽しかったです。
- 古着とリボンを組み合わせた衣装を制作したのですが、リボンをリボンのままにしたくないと思い、試行錯誤した結果リボンはうまく行ったのですが、古着が疎かになってしまい、かなりそのままになっていたので、もっと古着と素材の組み合わせのデザインに幅を持たせたいと思いました。

13. ファッションショーに取り組んだ人は、観た人に何が伝えられたと思いますか、自由に記述してください。

- 楽しそうな雰囲気は沢山伝えられたと思います
- 普段は廃棄されている廃棄素材でもこんなに生まれ変わって新しい服やかばんになるということ。
- 廃棄素材をどうデザインに取り込むかを試行錯誤した結果、独自の技法を生み出してそれを企業の方々に認めてもらえたので、この取り組みを通して廃棄素材を使って服にするだけではなく、これから未来へのデザインになっていくのだということを伝えられたのではないかと思います。
- 創造力がとても拡がってきている事
- 廃材でも綺麗な服になることが出来ること
- 個性やこれからの可能性
- いらなくなつた布や素材が、こんなにも素敵なものにうまれかわり人の目を惹くものに変身できるということを伝えられたと思う。必要とされなくなつたものでも、何か少し手を加えるだけで生まれ変わることができるのだということも伝えられたと思う。
- 廃材や古着の可能性、アイデア
- デザインの可能性。
- 廃材から生まれた作品だと意識して見てもらうことで、「本来ならゴミになっていたかもしれないものが、こんなふうにファッションに生かせるのだ」という可能性や、逆に活かされなければ廃棄されてしまうという危機感を伝えられたのではないかと感じた。
- サステナブルな服は家庭にある材料から作れます。
- リボンを使えば普段使いもできそうな服ができ、日常からSDGs できることが伝えられた。
- 廃材で製作できる衣服の可能性
- リサイクルされた布や使い古された物であっても何かになり誰かに楽しさを届けられたと思いました。
- 廃棄素材の持つ可能性を伝えられたと思います。また、生地ではなく廃材から衣装を作る楽しさを自身も感じました。
- 私はリボンをメインに作品を制作したのですが、ただのリボンが洋服のワンポイントとして普段のお洋服に華を添えることが出来るのだと伝わっていたら嬉しいです。
- 学生の自由な発想。
- 廃材から制作されたとは思えないほどのデザイン豊かな衣装。
- 捨てられるはずだったものがこんなにも素敵な服たちに変わって、使わなくなったから捨てるという考えが少しでも変わったのではないかなと思います。
- ひとつの素材でこれだけさまざまなものに変換できる可能性を伝えられたと思います。
- すごく堂々としていてかっこよかったです
-

14. 古着ラボに参加した人は、その感想を自由に記述してください。

- 普段ミシンを使ったことがないし、初めてリメイクしましたが、縫い方すら分からずで頑張って最後まで作れたので達成感が沢山あります
- 参加してないです。
- すごく楽しかったです。他の大学の方の作っている様子も見れて、会話も生まれたので良い取組だと思いました。自分ももっとできるようになりたいと思いました！
- 新品のようなものも多くあり、すごく勿体ないなと思いました。また、とりあえずチャレンジすることが大切だなと改めて思いました。
- 自分が好きなようにアレンジして服やかばんを作れて楽しかったです！でも集められた古着を見てまだまだ着られる服が沢山あり、もったいないなと思いました。
- 回収衣類を前にした学生からは、「まだ新品なのに」「まだ着られるのにもったいない」といった声が多く聞かれました。 ラボに参加した学生にとって、この経験はこれまでの消費行動を見直すきっかけとなり、今後の行動にも良い影響を与えるのではないかと思います。 そして何より印象的だったのは、ものづくりを通して自然なコミュニケーションが生まれる場になっていたことです。 「どうすればまた使えるアイテムになるか」「どうすれば使いたいと思えるアイテムになるか」を、短い時間の中で考え、手を動かす。それをイベント内で行うこと深い意味を感じました。
- すごくいい服も捨てられていることに気づきました。
- 会場では様々なインスピレーションを受け、製作意欲が高まっていたため、それをその場で発散できた事がよかったです。
- もっとあちこちにこういう場があれば気軽にリメイクできるのでは？と感じた。ネットショッピングが流行る中、実際に届いてきてみたら違った。だからもう着ない、捨てるなどが減るという考え方方が変わる1歩になると感じた。着ない服同士を繋ぎ合わせるのってすごく素敵に感じた
- 古着として回収されていた服たちはまだまだ着られる服、私自身も着用したいと思う服があった為、これらが廃棄されるのは勿体ないと実感した。
- 組み合わせ次第で無限の可能性を秘めていると感じました。もっと縫製を学んでその可能性が活きるアップサイクルをしてみたいです。
- 他大学の方の作品からもとても刺激を受け、今後の制作に活かしていくと感じた。
- まだまだ着れるような綺麗な服ばかりがあり、もったいないなと思いながら、それぞれを組み合わせて使ってみたのですが、既製品を別の姿に変えるにはあまりにも完成された形すぎて、アイデアが浮かばず…、もっと面白いことをしたかったなど悔いが残りました。

17. 今回参加して最もインパクトがあったこと（印象的なこと、思い出になること等）を記述してください。

(1/3)

- ファッションショー
- ファッションショー 初めてこのイベントに参加して、初めてモデルも経験して沢山の他大学の先輩とお話がてきて たくさんいい思い出ができました！！
- 廃棄量の多さ、綺麗さ(まだ着られるのに捨てられている)
- ワークショップ
- 学生トークでは、自分たちの先輩方の過去の活動についても改めて知ることができました。また、自分の商品を見て、他大学の先生方から SNS で見たよと声をかけていただけた時は、広報の重要さを感じました。
- 繊維企業様と学生の交流が頻繁に行われていたことにも学びがありました。
- 端材素材の可能性について考えさせられることが大いにあった。
- 同じ素材を使っていても全く違うファッションになっていて素敵だと感じました。ファッションショーが未経験で初めは恥ずかしい気持ちが大きかったですが他大学のこの間たちとも仲良くなることができ、ファッションショー 자체を楽しむことができました！
- 企業の取り組みで、土にかえる服が衝撃的だった。もっと広めたいと思った。最後の音楽がとても素敵で楽しかった。楽器のアイディアが素晴らしいなと思った。さらに広めたいと思った。
- 参加大学が想像以上に多くて、私が考えていたリサイクルとは違う方向からリメイクやワークショップをしている点が印象に残った。
- ファッションショーです。この企画をする前まで自分がショーに出るなんて思いもしていませんでした。自分で考えて作った服を自分で着て他の人に見てもらえるのはとても嬉しかったです。
- 他大学さんとの関わり
- 芸術分野で衣服を制作されている方々の作品
- 他の大学の作品を見てみて、それぞれの大学の色がうまく表現されていて、違った良さがあったしその違いが面白かった。
- 多くの企業が環境に配慮した製品を制作販売しているにも関わらず、その内容や技術が世間一般に広まっていない事に企業トークなどを通して気づいた。
- 他大学の制作のデザイン性や技術の高さに驚いた。
- 他大学のファッションショー
- 本格的にデザインやショーについて学んでいる学生のレベルの高さ
- 学生トークショーでそれぞれの学校の取り組みを知れたこと。
- たくさんの学生に会えたことです。それぞれの大学で学んでいること、取り組んでいることなど色々話ができる、とても刺激を受けました。
- 全て楽しかったが、ワークショップを終えた後のかわいい！という褒め言葉が毎回とても嬉しかった。
- 自分の制作した商品が売れたこと
- 他大学の方がデザインされた、廃材を使った服が印象的です。こんなデザインもあるのかと勉強になりました。
- みんなで歌を歌ったのがすごく楽しくて素敵な経験だと感じました。
- いろんな大学からの生徒と会えていっしょにかつどうできて、いい経験になりました。
- 来場者の方々が繊維廃材について関心を持っておられたこと。

■ いろんな大学の方たちとデザインした服を見せ合うことで新たな服への関心が広りました。
■ 廃棄プラスチックを使って植物をそだてる活動をしていた企業様があったこと。
■ 多くの参加者が目を輝かせながら、好きなことを SDGs と交えて楽しく活動していたこと。
■ 土にかえるポリエステルは画期的で衝撃を受けました。
■ 繊維廃材がさまざまなアイテムに生まれ変わっていて、アイデアとデザインに刺激を受けたこと。
■ 古着が思った以上にあったことと羊の毛の話がとても面白かったです。

(3/2)

■ 他大学のデザイン
■ 他大学の学生との交流があったり、貴重な講演会で沢山の学びと知識を得られたり、考えるきっかけになったため、衣を学ぶ学生としてとても有意義な時間となった。もっと向き合って、自分はどのようにして衣に関わっていくかを考えようと思った。また、自分たちがデザインして制作した服を着て歩くモデルさん達が1番輝いていたし、みんなそれぞれ個性が溢れ出ていて凄く素敵な空間だったので、いい思い出になった。
■ 舞台演出を学ばれている学生さんの、ファッションショーでの表現力が、芸能人やモデルさんみたいにすごくて、とても魅力的で驚きました。
■ ファッションショーで、他大学の服がとても複雑なものもあり、インパクトがあった。それを着用していたモデルさんも表現が上手だった。
■ 私はワークショップに参加した時にお客さんや他大学の方と多く関わり、その中で SDGs の取り組みは楽しみながら出来るのだと感じることが出来ました。
■ ファッションショーの演出が凄い方がいて、印象に残った。縄跳びで作ったドレスが凄かった。
■ ファッションショーがメインで販売が震んでいるように感じた。ファッションショーの服を販売することや、小物にももっと力を入れたいと感じた。販売の機会が増えたらそれもそれで嬉しい。
■ トークショーでの「リサイクルは楽しくなければ成立しない」という言葉が非常に印象的でした。環境にやさしい方が良い、地球の未来を考えるためにという大義名分はありながらも、やはり自分事としてとらえ、取り組むためには楽しむことが大事だと改めて感じました。
■ 他大学の衣装がとても個性的で、同じように廃材から製作されたものとは思えないほど丁寧な作りであった。参考になった。
■ 音楽ショーが新しい取り組みで面白かったと感じた。
■ 他大学との交流が初めてだったため、ワークショップや各大学のプレゼンなど良い刺激になった。
■ 展示品のクオリティーの高さ、デザイン性の高さにとても驚きました。
■ 講演会
■ 他学生さんの作品がすごくて、想像の幅が広がったことです。
■ 縫製業についてのお話がとても印象に残りました。私自身、縫製職に就きたいと考えており、実際にインターンに行ったものもあるので、とても考えさせられる内容で面白かったです。
■ 自分のリメイク作品を購入してくださる方がいたことが嬉しく、貴重な体験をさせていただきました。また、他大学の学生さんの作品やトークショー、ファッションショーからは新たなアイデアや視点を得ることができました。
■ 各大学の取り組み
■ ファッションショーが色々なもので服を作れるんだと参考になった
■ 舞台演出を学ばれている学生さんの、ファッションショーでの表現力が、芸能人やモデルさんみたいにすごくて、とても魅力的で驚きました。

的で驚きました。

- ファッションショーで、他大学の服がとても複雑なものもあり、インパクトがあった。それを着用していたモデルさんも表現が上手だった。
- 土にかえるポリエステルは画期的で衝撃を受けました。
- 繊維廃材がさまざまなアイテムに生まれ変わっていて、アイデアとデザインに刺激を受けたこと。
- 古着が思った以上にあったことと羊の毛の話がとても面白かったことです。
- 他大学のデザイン
- 私はワークショップに参加した時にお客さんや他大学の方と多く関わり、その中でSDGsの取り組みは楽しみながら出来るのだと感じることが出来ました。
- ファッションショーの演出が凄い方がいて、印象に残った。縄跳びで作ったドレスが凄かった。

(3/3)

- 他大学の衣装がとても個性的で、同じように廃材から製作されたものとは思えないほど丁寧な作りであった。参考になった。
- 音楽ショーが新しい取り組みで面白かったと感じた。
- ファッションショーがメインで販売が震んでいるように感じた。ファッションショーの服を販売することや、小物にももっと力を入れたいと感じた。販売の機会が増えたらそれもそれで嬉しい。
- トークショーでの「リサイクルは楽しくなければ成立しない」という言葉が非常に印象的でした。環境にやさしい方が良い、地球の未来を考えるためにという大義名分はありながらも、やはり自分事としてとらえ、取り組むためには楽しむことが大事だと改めて感じました。
- 他大学との交流が初めてだったため、ワークショップや各大学のプレゼンなど良い刺激になった。
- 展示品のクオリティーの高さ、デザイン性の高さにとても驚きました。
- 講演会
- 他学生さんの作品がすごくて、想像の幅が広がったことです。
- 縫製業についてのお話がとても印象に残りました。私自身、縫製職に就きたいと考えており、実際にインターンに行ったものもあるので、とても考えさせられる内容で面白かったです。
- 自分のリメイク作品を購入してくださる方がいたことが嬉しく、貴重な体験をさせていただきました。また、他大学の学生さんの作品やトークショー、ファッションショーからは新たなアイデアや視点を得ることができました。
- 各大学の取り組み
- ファッションショーが色々なもので服を作れるんだと参考になった
- 音楽ショーが新しい取り組みで面白かったと感じた。
- 他大学との交流が初めてだったため、ワークショップや各大学のプレゼンなど良い刺激になった。
- 展示品のクオリティーの高さ、デザイン性の高さにとても驚きました。
- 講演会
- 他学生さんの作品がすごくて、想像の幅が広がったことです。
- 縫製業についてのお話がとても印象に残りました。私自身、縫製職に就きたいと考えており、実際にインターンに行ったものもあるので、とても考えさせられる内容で面白かったです。
- 自分のリメイク作品を購入してくださる方がいたことが嬉しく、貴重な体験をさせていただきました。また、他大学の学生さんの作品やトークショー、ファッションショーからは新たなアイデアや視点を得ることができました。

- 各大学の取り組み
- ファッションショーが色々なことで服を作れるんだと参考になった

18. あなたが思う今回のイベントの全般の改善点とそれに対するアイデアを記述してください。

トークショーのときにワークショップがしたいです。 お客様にも手を止めてもらったり、 せっかくワークショップをしに来てくれた お客様をお待たせする事になってしましました。 1日目は、退勤ラッシュを逃してしまい少しもったいなかなと感じました。 お話をされている中、お話を集中せずながらで 聞くのは失礼にあたるのも凄くわかるのですが、 お待たせするのも申し訳ない気持ちになってしまいました。 改善案は思いつきませんが、よろしくお願ひします。

荷物置き場！

演奏とファッションショーのコラボ。みんなで演奏したのが楽しかったからもっとコラボしたいなと思った。

会場が少し狭いと感じました。

一般の方に向けて行うのかというポイントだと思います。気になったときに見やすい展示やポスターを外側に増やすのも良いのかなと思いました。

チラシだけでなく、大々的な一日のスケジュールを看板などにして貼っているとより興味のある時間に皆様が来やすいのかなと思いました。

講演会の時間をもう少しコンパクトにして、数を増やした方がより聞きやすい環境になるのではないかと考えた。

1日のスケジュールを看板で見られるようにして欲しいです。

広報担当者を明確に決めることができれば良いと感じました。 イベント期間中だけでなく、終了後も継続して情報発信を行うことで、自然にリーチ数が増えていくと思います。 また、その積み重ねによって来年度の来場者獲得にもつながりますし、他大学の取り組みを共有できれば、参加している（参加していた、又はする予定）学生にとっても大きな刺激になると考えます。

トークショーとかを短くてもいいと思います

ファッションショーの服は服になる前の写真や素材も展示しておくべきだと思います。

更衣室が狭く、トイレで着替えたら一般客もおり少し気まずかったのでもう少し広い更衣室が欲しかった。

私が自分の大学のメンバーを率いていた立場であったこともあり、皆様のスケジュール変更や決定事項の伝達が少し遅いように感じてしまいました。ご事情があるとは思いますが、直前になっても不明瞭な点が多く、運営の方々だけで進んでいる事が多い印象を受けました。もしもっと早く伝えていただいたら、自分たちも出来ること（フラッグの製作や会場設営など）があったかもしれません！ 今回で3回目の参加でしたが、イベントが盛りだくさんでとても楽しかったです。貴重な機会をいただきましてありがとうございました。

もっと販売を盛り上げたい！

改善点としては、ファッションショーの舞台が観客と同じだった為、モデルの華やかさが伝わりづらかったのではないかと思う。

去年と同じようにステージの上で演出の方が迫力があると思う。

物販の商品を作っていたが、場所柄の問題もあり売れ残りを出さないという全体の目標であったのに、沢山でたことが残念だった。学生でも各々が情報発信をして来てもらえる工夫をした方が良いと感じた。

人通りの少なさ 興味を持ってくださる人が多い場所を探していく

古着ラボの作業場所をもう少し広くとって欲しいと思いました。

物販の時間をもう少し長くして欲しい。 人通りの多い場所に会場を設けた方が多くの方に来ていただけると思った。

4.3 来場者の声

来場者からは、「アパレル産業の現状を知る貴重な機会になった」、「学生の作品とは思えないほどクオリティが高い」など、多くの好意的な感想が寄せられた。なかでも、ファッションショーや展示作品の創造性に感動したという声や、新たな可能性を感じたという意見が目立った。一方で、「男性向けの展示も見てみたい」といった今後の期待も寄せられた。以下に、イベント後に実施したアンケートから、来場者の感想を抜粋して紹介する。

(文責/データ整理:宮原佑貴子)

Q4. 本イベントで参加あるいはご覧いただいたものについて、是非とも感想をお聞かせください。

(1/2)

■ 男性向けのものが見たい
■ アパレル産業の現状を知ることができて、貴重な機会となりました。また、学生の方々がたくさん参加されていて、今後のアパレルのあり方が変わっていくかもしれない期待を持てました。
■ 色々な大学の方と関われてとても楽しい
■ 他の大学の活動を聞いたり、ワークショップに参加したりなど交流することができ、勉強にもなった。
■ ファッションショーの衣装が個性的で印象に残りました。他の大学の方の活動内容も知ることができて良かったです。
■ 創造性に満ちた、とても気分が上がる空間で見ているだけで楽しかった。
■ 学生トークショーや、リメイク作品など、とても面白かったです！
■ 他大学の活動を知ることができた。
■ グレードの高いワークショップがあれば学生のみなさんが環境について色々と考えながら活動していることがわかりました。
■ 面白い作品を沢山見ることができた。興味深い公演が聞けた。
■ 個性溢れる展示物が多く、興味深い。
■ たくさんの個性的な衣装が可愛かったです。展示の仕方も素敵でした
■ ファッションショーでは、廃材とは思えないほどの衣装ばかりでとても感動しました。本来捨てられていたはずのお洋服が見せ物として変化していることがとても素敵だなと思いました。
■ 学生トークでは、人前で発表し、質疑応答するという貴重な経験ができました。
■ 素材を利用するだけでなく、魅力的なデザインで作成することができるのがすごいと思いました。
■ ワークショップに参加した娘がめちゃくちゃ喜んでいました。
■ 大学生がファッションだけでなくサステナブルそのものに対する興味が強く、またその知識も豊富で、普段からの勉強を眞面目にやっている事が伝わってきました。
■ また、各ゼミの発表も企業側から見ても興味深いものが多く、我々も勉強になりました。
■ 学生さんの感性がすばらしかったです
■ 展示コーナーでは、企業の様々な取り組みを実物の物と共に触れられた。
■ 素敵でした
■ 学生トークショーは実際にしている学生から直接話を聞けたから良かった。
■ 古着や廃材がカワイイものたちに生まれ変わっている場面を見てることができて楽しかった
■ 他大学の皆様や企業の皆様はもちろん新たなアイデアなど「出逢い」の大切差が改めて感じることの出来る 3日間でした！
■ 演奏会と一緒に参加しました。「明日があるさ」の曲、楽しかったです。
■ リメイク品の幅の広さに驚きました

- 思っていたよりもこれからのためになる講演が多く学びになりました
- リメイク作品が多かったとかんじましたが、それぞれ素材選びに作者の感性を感じられて面白かったです

(2/2)

- SDGsについて考えるきっかけになりました
- 繊維素材について知れる。ファッションの可能性を知れる。アイディアを貰えて良い刺激になる
- 勉強になりました
- みんなで演奏たのしかった
- 廃材利用で作ったもの、いっそうの質の向上を期待します。
- 学生の作品とは思えないくらいクオリティが高く、またアイデアに富んだ作品が多くありました。
- すみません、古着を持ってきただけなので参加していません。
- リメイクされた服をみて古着の新たな可能性を感じた
- 自分が作った作品が売れていたのがとても嬉しかったし、ワークショップで他大学の方と関わって楽しかったです。
- 服飾を学ぶ学生として、他の大学や企業、先生方の考える考え方や活動、想いなどを触れる時間を過ごせたことで、自分自身服についてもっと考えるきっかけができた。
- ファッションショー衣装のクオリティに驚いた
- アップサイクルについて学び考えることができました。
- クオリティの高いものが多くて驚いた
- 学生たちの熱意ある取り組みが素晴らしいと思います。
- 勉強になりました。
- 施設の中でオープンな雰囲気のある展示が入りやすいと感じた。
- イベントの入口のマネキンを着せ替えをしてイベントの顔になる重要な役割をさせて頂けてとてもいい経験ができた良かったです。
- 入口のマネキンを着せ替えという重要な役割をさせて頂けてとても嬉しかったです。
- 想像豊かな衣類が沢山展示されており素晴らしい
- 古着から自分が新しく着ることができる服を作り出すことができとても楽しかったです
- 素敵な作品ばかりで見惚れました。また子供と一緒に参加したいです。来年の夏休みの作品のヒントも得た気がしますし、子供の着れなくなった服を再利用したくなりました。
- 他の学生のトークショーを聞くことで他のチームの研究内容について学ぶことが出来ました。
- 個性溢れていた
- 他の大学の活動記録を見る機会はなかなか無いので、他の大学で独創性や廃材についての考えを聞き、今後の制作などの意欲が高まりました
- アイデアの豊かさに驚かされました。
- ファッションショー それぞれの学校ごとにデザインや雰囲気が違っていたり、何の素材からできているのか気になるような衣装もあった。
- 廃材を活用しているというのが、すごく良いイベントだと思いました。
- 自分たちが作った服と他の学校の学生たちが作った服はデザインが違っていて個性様々で面白かったです。

4.4 株式会社サンケイビル様（会場提供会社）の声

今回のイベントでは、館内のテナント様とも連携していただき、繊維廃材という社会的課題について多くの方が考える機会が生まれたことを、私たち施設としても大変意義深く感じております。

また、多くのお客様に足を運んでいただき、館内に活気があふれたことも嬉しく思います。当施設では、1階のスペース（メディアコート）を活用し、さまざまな取り組みを行ってまいりましたが、今回のイベントには特別な意義を見出し、無償での貸し出しという形で協賛いたしました。この機会が、皆さまの今後のさらなる発展につながることを期待しております。

5.おわりに

「私たちの SDGs2025～繊維製品の循環をめざして～」は、3日間のイベントを無事に終えることができました。あらためまして、開催にご協力・ご尽力いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

今回も関西の12大学から100名を超える学生が参加し、日頃は異なる分野を学ぶ学生同士が同じテーマのもとに集い、ともに活動する中で交流や刺激が生まれる場となりました。

一方で、今後さらに充実させていくべき課題も明らかになりました。ここでは、特に3点について述べたいと思います。

まず1点目は、パネル展示やトークショーです。企業・団体と学生が交流する貴重な機会があったものの、イベントの中では十分に意見を交わす時間を確保できなかつたと感じています。今後は事前期間も含め、SDGsに関する重要な取り組みを推進する企業・団体と学生がより多く交流し、意見を交わす機会を増やすことで、社会とつながる接点をさらに広げていきたいと考えています。

2点目は、アップサイクル制作品のその後です。今年は、これまでの3年間で協力企業の皆様から提供いただいた繊維廃材の各大学の残部を優先的に活用しました。イベント終了後に残る学生のアップサイクル制作品（展示品）についても、循環を意識した取り組みが必要であると感じています。新しい価値を生み出すことと同時に、作品のその後の扱いや未来を考えることも大切だと考えています。

そして3点目は、エンウィクルを持続可能な活動として継続していくことです。

年々、夏の暑さが厳しくなるなど、私たちの肌にも変化を感じます。待ったなしの変わりゆく時代の中で、皆様からいただくご意見を参考しながら、より柔軟に活動を継続していきたいと考えています。ひとつひとつの積み重ねが、繊維製品とともに生きる私たちの未来を切り開く底力になると考えています。

引き続き皆様のお力添えを賜りながら、エンウィクルの活動をより充実させてまいりたいと思います。どうか引き続きご助言・ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

（文責：宮原佑貴子）

資料集

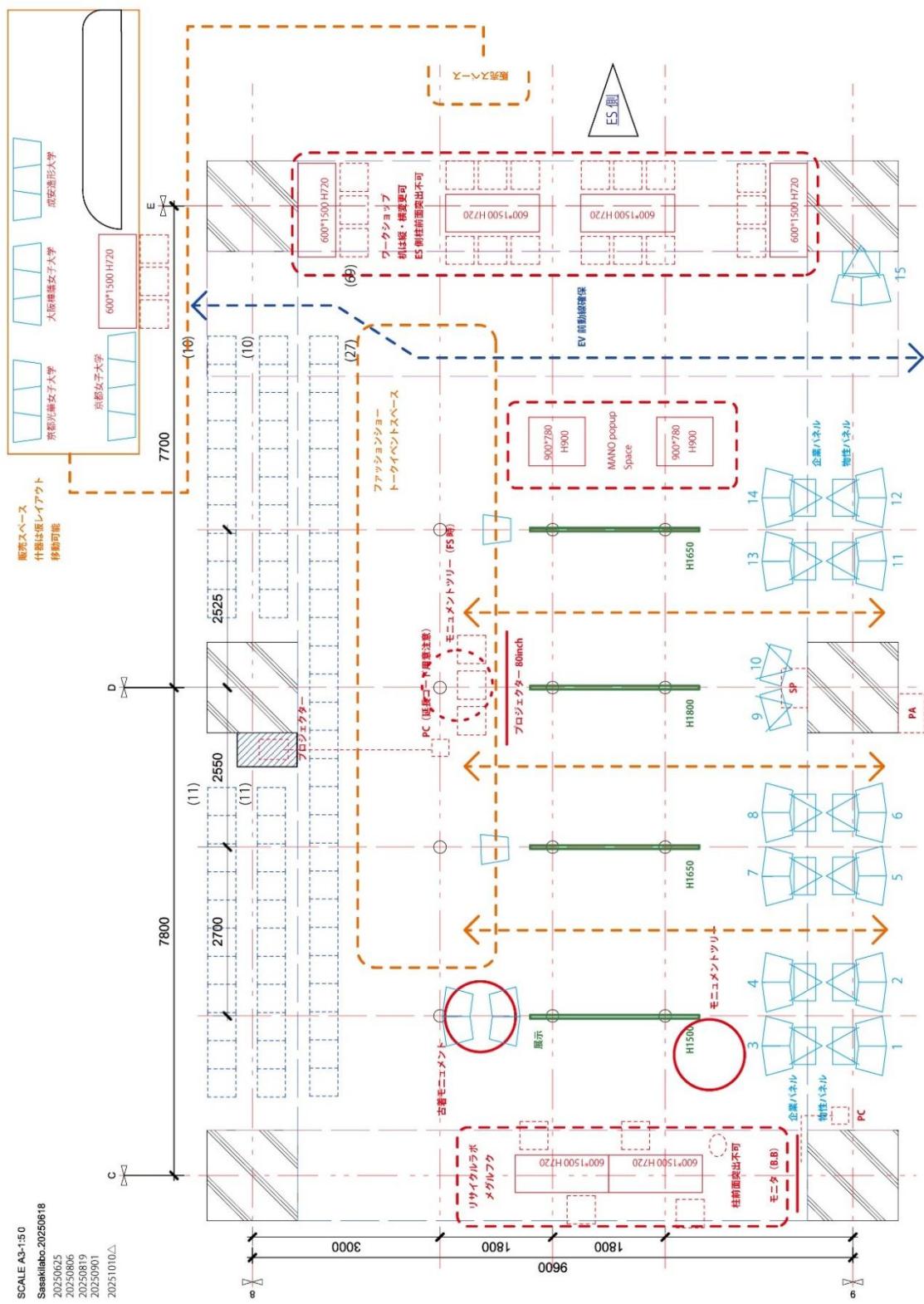
資料1	
主催、共催、協賛、後援、資材提供	
主催	一般社団法人日本繊維機械学会繊維リサイクル技術研究会・「私たちの SDGs」実行委員会
共催	一般社団法人日本繊維機械学会フェロー会 NPO 法人未利用資源事業化研究会
後援	京都工芸繊維大学・繊維科学センター 協同組合関西ファッショングループ (KanFA) 近畿経済産業局 京都市ごみ減量推進会議 (公益財団法人京都市環境保全活動推進協会) 一般社団法人日本繊維製品消費科学会 ダイセン株式会社 (繊維ニュース) 日報ビジネス株式会社 (循環経済新聞) 株式会社織研新聞社 大阪市教育委員会 大阪府 大阪市 一般財団法人ボーケン品質評価機構 一般社団法人 Textile Circular Network 一般社団法人 Textile Upcycle Platform
協賛	株式会社サンケイビル
資材提供	(有)井上企画・幡、エシカルカウンセル、エフアンドエイノンウーブンズ(株)、岡本(株)、(株)カズマ、金井重要工業(株)、(株)カラーループ、木下製網(株)、清原(株)、キヨーワ(株)、(株)SHINDO、(株)ジャパンブルー、太陽工業(株)、高島リボン(株)、瀧本(株)、(株)チクマ、帝人(株)、トーア紡マテリアル(株)、東リ(株)、時田毛織(株)、ナカノ(株)、東谷商店、(株)フジックス、宮井(株)、(有)村田堂、(株)ワコール、ワタキューセイモア(株)
	順不同

資料 2

実行委員、参加大学、協力

実行委員	宮原佑貴子（京都光華女子大学）：実行委員長 三宅 肇（甲南女子大学）：副実行委員長 木村照夫（京都工芸繊維大学）：全体総括 森下あおい（滋賀県立大学） 井上真理（神戸大学） 桂 阿子（京都女子大学） 奥林里子（京都工芸繊維大学） 與倉弘子（滋賀大学） 西 晃平（四天王寺大学短期大学部） 川村朱乃（四天王寺大学短期大学部） 谷 明日香（大阪樟蔭女子大学） 佐々木一泰（滋賀県立大学） 小野寺美和（甲南女子大学） 田中秀彦（成安造形大学） 成実弘至（京都女子大学） 中村真悟（立命館大学）
参加大学	滋賀県立大学 滋賀大学 京都光華女子大学 京都女子大学 京都工芸繊維大学 甲南女子大学 神戸大学 大阪樟蔭女子大学 四天王寺大学短期大学部 立命館大学 関西大学 成安造形大学
協力	吳 鴻（京都光華女子大学）：映像
	順不同

資料3. 会場レイアウト図



(佐々木)

資料4 参加学生一覧

(1/2)

甲南女子大学		
所属 (学部学科)	学年	氏名
人間科学部 生活環境学科	3年	内 初夏
	3年	内田 茉依
	3年	大上 璃子
	3年	大竹 由記
	3年	岡井 夏凜
	3年	岡本 紗和
	3年	岡本 結衣
	3年	甲斐 陽菜乃
	3年	河路 さくら
	3年	隈元 理央
	3年	齊藤 茉奈美
	3年	佐藤 萌
	3年	留村 真菜美
	3年	長谷川 七菜
	3年	藤谷 夏華
	3年	藤本 結空
	3年	正木 四葉
	3年	水本 結麻
	3年	山崎 爽楽
	3年	劉 美来
人間科学部文化社会学科	4年	千歳 朋香
	4年	西村 愛梨
心理学部心理学科	1年	石津 采音
心理学部心理学科	1年	栗野 みさと

京都女子大学		
所属 (学部学科)	学年	氏名
家政学部 生活造形学科	1年	松村 真子
	2年	石橋 花音
	2年	市川 杏
	3年	井上 幸花
	3年	神山 紗羽
	3年	山根 結衣
	3年	細井 美晴
	3年	松山 史穂
	3年	千賀 緹絵
	3年	森田 真央
	4年	藤井 ほの花
	4年	多田 美和
	4年	長渡 千風
	4年	泉 咲
	4年	相賀 柚希

大阪樟蔭女子大学		
所属 (学部学科)	学年	氏名
学芸学部 化粧ファッショングループ	3年	尾坂 朱莉
	3年	梶本 采音
	3年	松尾 佑花
	3年	和田 日向
	3年	宗澤 ジュエル
	3年	樋 花琳
	3年	吉村 茉緒莉
	3年	森 美緒
	3年	高須 咲知
	3年	岩田 朋華
	3年	田中 瑠菜
	3年	得永 ゆらら
	3年	前田 万里奈
	3年	奥野 由依
	3年	吉村 茉緒莉
	3年	浅野 芽衣
	4年	和田 真穂
	4年	奥野 恋彩

立命館大学		
所属 (学部学科)	学年	氏名
経営学部 経営学科	2年	三木 茉奈佳
	2年	坂本 ゆい
	2年	西本 美優
	2年	重里 実橙
	2年	飛田 紗希
	2年	JUNG Yunji
	4年	長岡 陽彩
グローバル教養学部グローバル教養学科	1年	岩瀬 アエシャ 未麗

京都光華女子大学		
所属 (学部学科)	学年	氏名
キャリア形成学部 キャリア形成学科	3年	一瀬 汐音
	3年	今村 優希
	3年	岩間 瑞希
	3年	樋迫 瞳季
	3年	南 志帆
	3年	森本 詩織
	4年	坂本 遼香
	4年	矢崎 葵織

四天王寺大学短期大学部		
所属 (学部学科)	学年	氏名
ライフデザイン学科	2年	清水 千颯
	2年	大槻 陽依
	2年	岡 優衣
	2年	鷺田 美桜
	2年	関 優衣奈
	2年	辰己 莉子
	2年	西田 小雪
	2年	野間 未結
	2年	日野原 汐夏
	2年	孫本 日菜
	2年	宮村 陽向
	1年	岩本 真愛

滋賀県立大学		
所属 (学部学科)	学年	氏名
人間文化学部	2年	池田 結
	2年	岡野 愛美
	3年	細野 小雪
生活デザイン学科		

京都工芸繊維大学		
所属 (学部学科)	学年	氏名
工芸科学研究科 先端ファイブロ科学専攻 博士前期過程	2年	多根井 克生

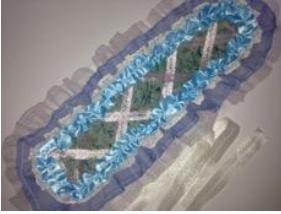
神戸大学		
所属 (学部学科)	学年	氏名
神戸大学国際人間科学部	4年	若狭 菜奈
人間発達環境学研究科 博士後期課程	2年	李 詩言

資料5 プロダクト一覧

提供元：有限会社 井上企画・幡

蚊帳素材

品番	画像	アイテム名	制作大学
KJ-01-sm3		リボンシュシュ	京都女子大学
KJ-02-is1		巾着（大）	京都女子大学
KJ-02-is2		巾着（大）	京都女子大学
KJ-02-is3		巾着（中）	京都女子大学
KJ-02-is4		巾着（小）	京都女子大学
KJ-05-ik1		ピアス(ピンク)	京都女子大学

KJ-05-ik2		ピアス（紫）	京都女子大学
KJ-05-ik3		ピアス（オレンジ）	京都女子大学
KJ-05-ik4		イヤリング	京都女子大学
KJ-05-ik5		イヤリング	京都女子大学
KJ-07-ms2		Headdress (パープル)	京都女子大学
KJ-10-mm1		シュシュ	京都女子大学
KJ-11-hm2		ヘアクリップ（2個 セット）	京都女子大学

提供元：東谷商店

吉 着

品番	画像	アイテム名	制作大学
KJ-01-sm1		くまちゃんの パスケース	京都女子大学
KJ-01-sm2		天使ちゃんにぎにぎ	京都女子大学
KJ-04-mm1		リボンキー ホルダー	京都女子大学
KJ-04-mm2		巾着	京都女子大学
KJ-05-ik3		シュシュ	京都女子大学
KJ-08-nc1		アイマスク	京都女子大学

KJ-08-nc2		ミニバッグ	京都女子大学
KJ-09-ky1		カチューシャ	京都女子大学
KJ-11-hm1		リボンヘアクリップ	京都女子大学
KJ-11-hm3		リボンバレッタ	京都女子大学

提供元：岡本株式会社

靴下輪っか

品番	画像	アイテム名	制作大学
KJ-03-ks1		キーホルダー (うすピンク)	京都女子大学
KJ-03-ks2		キーホルダー (グレー)	京都女子大学
KJ-03-ks3		キーホルダー (ピンク)	京都女子大学
KJ-03-ks4		キーホルダー (赤)	京都女子大学
KJ-06-yy1		スマホショルダー	京都女子大学
KJ-06-yy2		スマホショルダー	京都女子大学

OS-8-1 (小)		スマホショルダー	大阪樟蔭女子大学
OS-8-2 (大)		スマホショルダー 【ブラック×グレー】	大阪樟蔭女子大学
OS-8-3 (大)		スマホショルダー 【ピンク×グレー】	大阪樟蔭女子大学

提供元：高島リボン株式会社

リボン

品番	画像	アイテム名	制作大学
KJ-07-ms1		Headdress (ネイビー)	京都女子大学
OS-1-1		スマホショルダー	大阪樟蔭女子大学
OS-2-1		リボンイヤフォンケース	大阪樟蔭女子大学
OS-2-2		リボンバック白	大阪樟蔭女子大学
OS-2-3		リボンバック	大阪樟蔭女子大学
OS-2-4		リボンバック紫	大阪樟蔭女子大学

OS-7-1		シュシュ	大阪樟蔭女子大学
OS-7-2		シュシュ	大阪樟蔭女子大学
OS-7-3		シュシュ	大阪樟蔭女子大学

提供元：東リ株式会社

カーペット素材

品番	画像	アイテム名	制作大学
KJ-08-nc4		コースター 1	京都女子大学
KJ-08-nc7		コースター 2	京都女子大学
KJ-08-nc8		コースター 3	京都女子大学
KJ-08-nc9		コースター 4	京都女子大学
KK-03-1		バッグハンドル カバー	京都光華女子大学
KK-03-2		バッグハンドル カバー	京都光華女子大学
KK-06		アオリマント	京都光華女子大学

OS-4-1		メッシュバッグ	大阪樟蔭女子大学
--------	---	---------	----------

提供元：株式会社カズマ

カーテン素材

品番	画像	アイテム名	制作大学
OS-5-1 (空色)		フリル巾着トート	大阪樟蔭女子大学
OS-5-2 (ホワイト)		フリル巾着トート	大阪樟蔭女子大学
OS-5-3 (シルバー)		フリル巾着トート	大阪樟蔭女子大学
KK-01-1		シュシュ	京都光華女子大学
KK-01-2		シュシュ	京都光華女子大学
KK-01-3		シュシュ	京都光華女子大学
KK-01-4		シュシュ	京都光華女子大学
KK-01-5		シュシュ	京都光華女子大学
KK-01-6		シュシュ	京都光華女子大学
KK-01-7		シュシュ	京都光華女子大学
KK-01-8		シュシュ	京都光華女子大学
KK-01-9		シュシュ	京都光華女子大学
KK-01-10		シュシュ	京都光華女子大学

提供元：株式会社 SHINDO

リボン

品番	画像	アイテム名	制作大学
KK-02-1		リボン編み巾着	京都女子大学
KK-02-2		リボン編み巾着	京都光華女子大学
KK-04		イワマハーネス	京都光華女子大学
KK-05		カシサコハーネス	京都光華女子大学
KK-07		エビフライ	京都光華女子大学
SZ-05-01		リボンバッグ/黒 (SEIAN)	成安造形大学

SZ-05-02



リボンバッグ/赤黒
(SEIAN)

成安造形大学

提供元：株式会社フジックス

ミシン糸

品番	画像	アイテム名	制作大学
KJ-06-yy5		キーホルダー	京都女子大学
KJ-06-yy6		キーホルダー	京都女子大学
OS-9-1		iPhone ケース 14	京都女子大学
OS-9-2		iPhone ケース 15	京都女子大学
OS-9-3		iPhone ケース 16	京都女子大学

提供元：株式会社 colourloop

再資源フェルト

品番	画像	アイテム名	制作大学
KJ-06-yy3		ヘアピン	京都女子大学
KJ-06-yy4		ヘアピン	京都女子大学
KJ-06-yy8		小物入れ (グリーン)	京都女子大学
KJ-06-yy9		小物入れ (ホワイト)	京都女子大学

提供元：金井重要工業株式会社

フサ耳

品番	画像	アイテム名	制作大学
KJ-01-sm		ニットリボン パスケース	京都女子大学
KJ-06-yy7		シュシュ	京都女子大学

提供元：株式会社ジャパンブルー

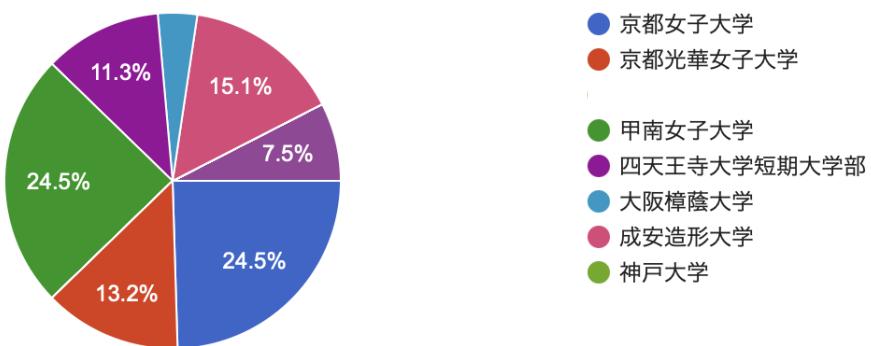
デニム素材（生機）

品番	画像	アイテム名	制作大学
OS-3-1		デニムバック	大阪樟蔭女子大学

資料6：「私たちの SDGs2025」 学生アンケート集計結果 (n=53) Google Forms を使用

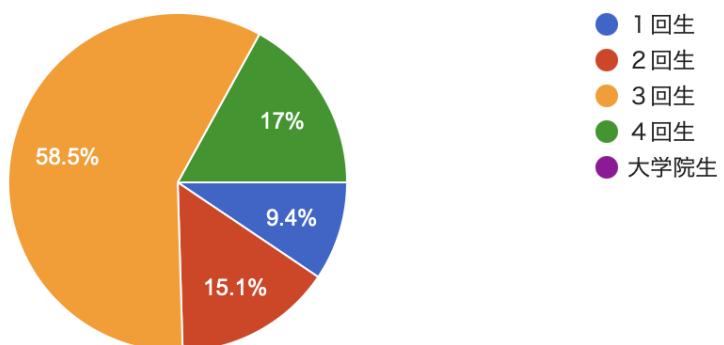
1. 大学名

53 件の回答



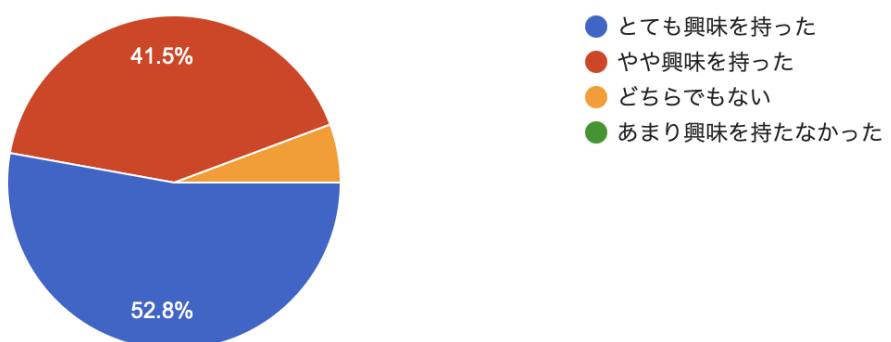
2. 学年

53 件の回答



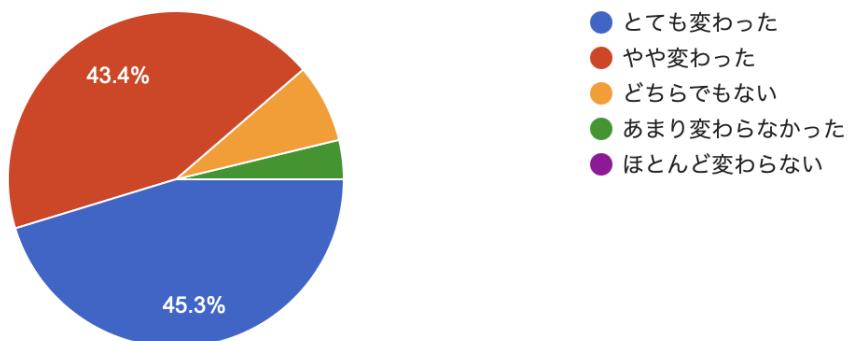
3. 今回のイベントには興味を持って参加できましたか。

53 件の回答



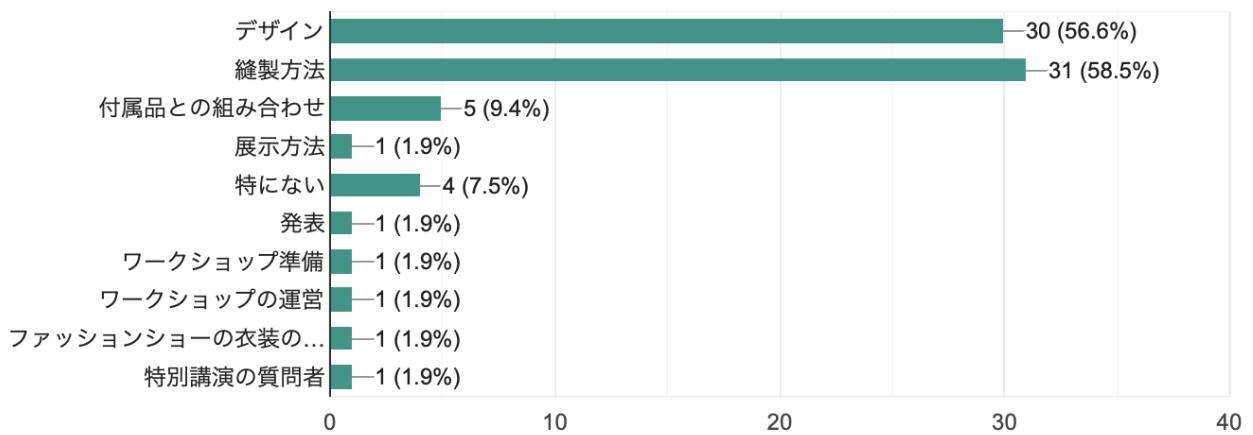
4. 今回のイベントに参加してSDGsについての意識は変わりましたか

53 件の回答



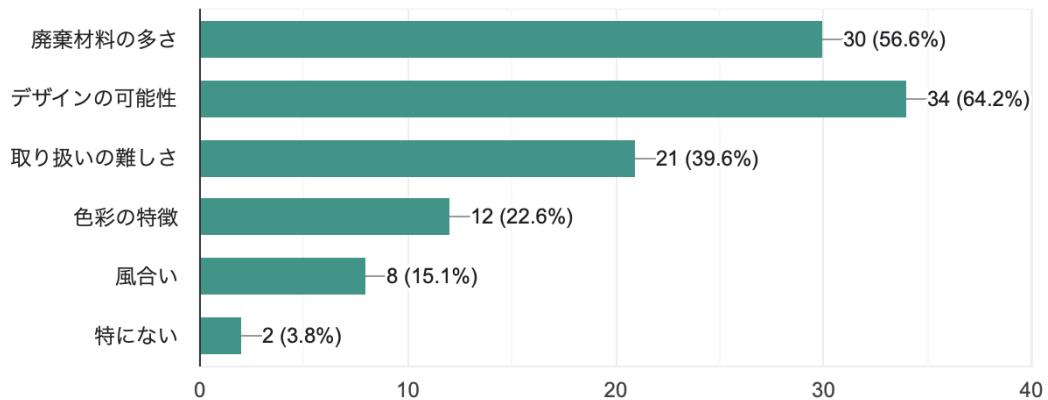
5. 今回、最も大変だったことは何ですか（複数選択可）

53 件の回答



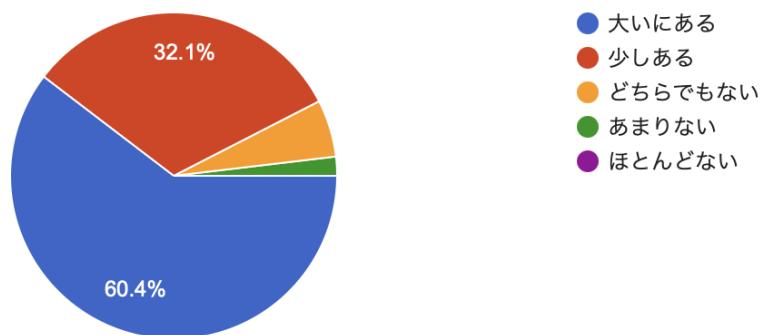
6. 廃棄予定の繊維を用いて制作して気づいたことは何ですか（複数選択可）

53 件の回答



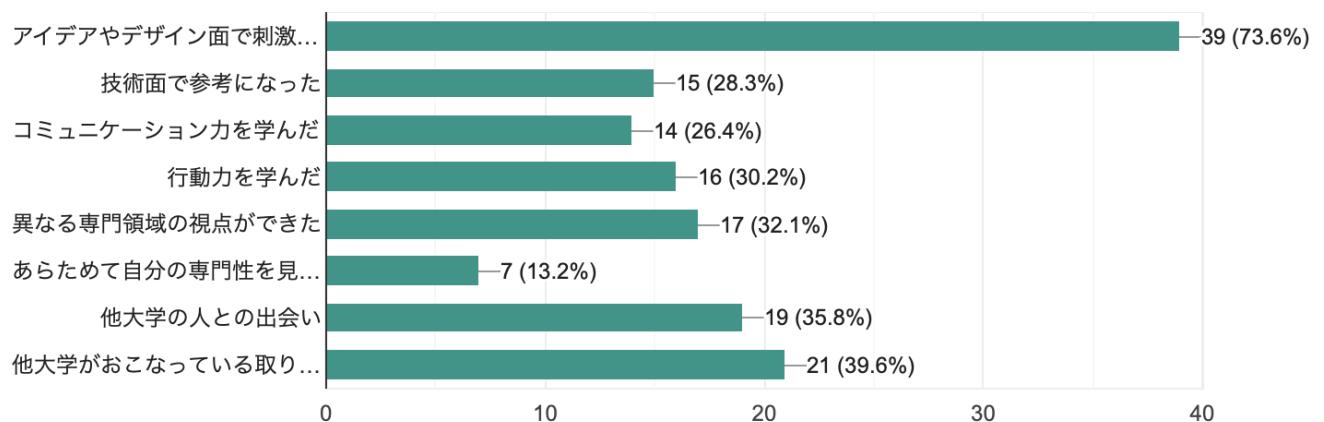
7. 他大学の学生と一緒に取り組んで良かったことはありますか

53 件の回答



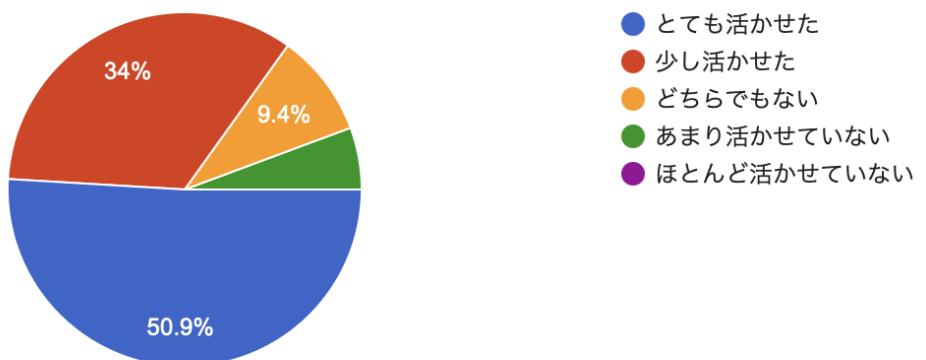
8. 「他大学の学生と一緒に取り組んで良かった」と答えた人は、どのようなことが良かったですか（複数選択可）

53 件の回答



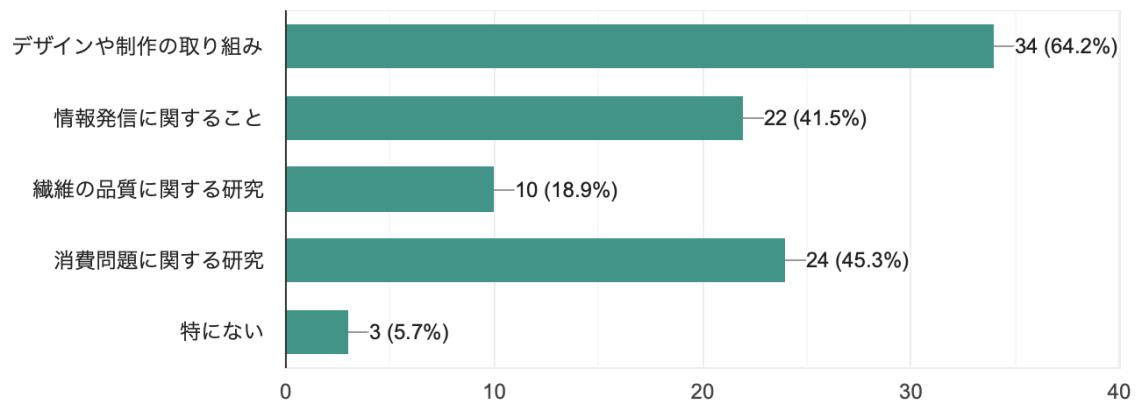
9. 自分の大学での学びや知見は活かせたと感じますか

53 件の回答



10. 自分の専門領域が可能なSDGsに関する社会貢献はどのようなことだと思いますか（複数選択可）

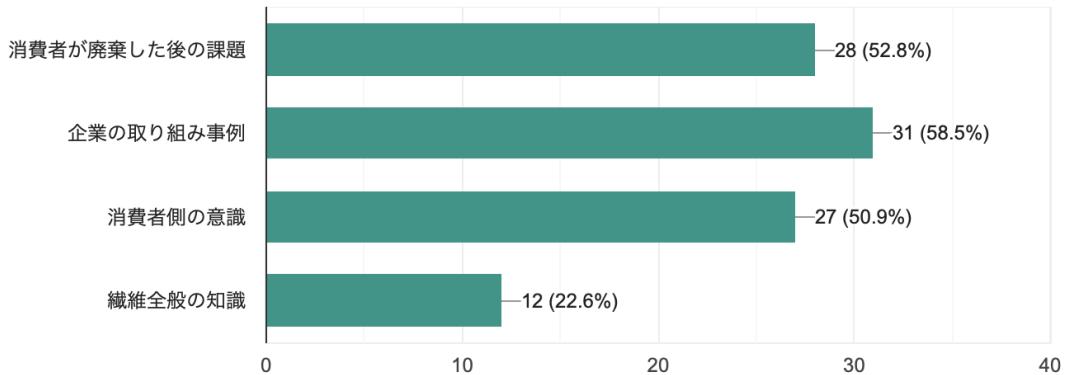
53 件の回答



11. 繊維製品の廃棄問題に関して関心のある（関心を持った）ことはどれですか（複数選択可）

[□ グラフを表示](#)

53 件の回答



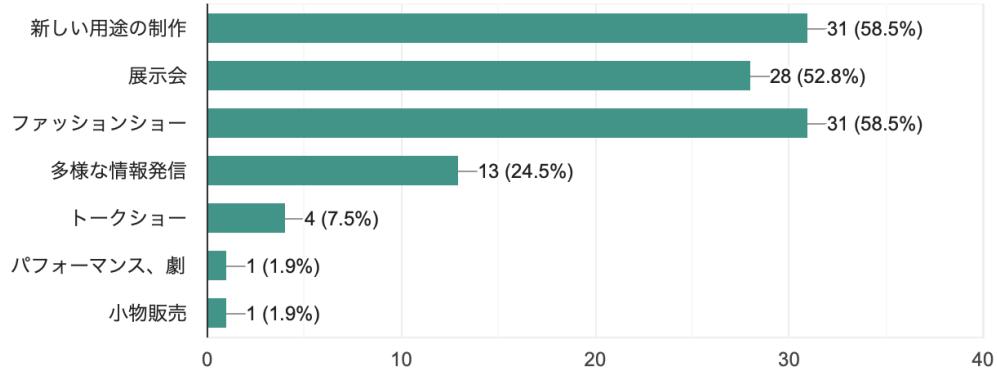
12. ファッションショーに取り組んだ人は、感想（大変だったこと、良かったことなど）を自由に記述してください。※ こちらの回答結果は「4.2 学生の声」に掲載しています。

13. ファッションショーに取り組んだ人は、観た人に何が伝えられたと思いますか、自由に記述してください。※ こちらの回答結果は「4.2 学生の声」に掲載しています。

14. 古着ラボに参加した人は、その感想を自由に記述してください。※ こちらの回答結果は「4.2 学生の声」に掲載しています。

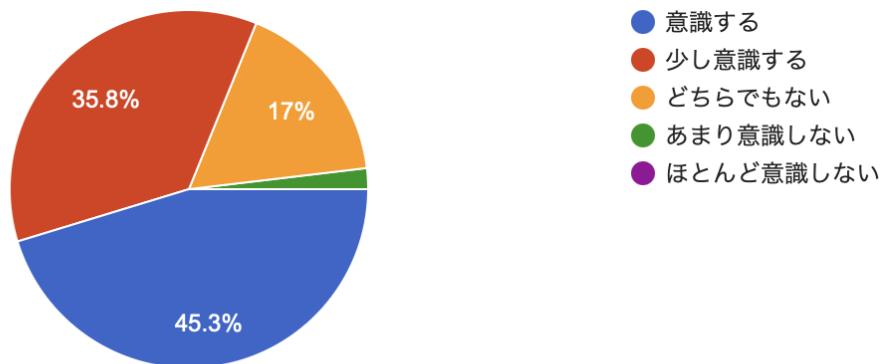
15. また、繊維廃材を使ったイベントをおこなう機会があれば、どんな内容がしたいですか（複数選択可）

53 件の回答



16. 将来の仕事を選ぶときにSDGsを意識しますか

53 件の回答



17. 今回参加して最もインパクトがあったこと（印象的なこと、思い出になること等）を記述してください。

※ こちらの回答結果は「4.2 学生の声」に掲載しています。

18. あなたが思う今回のイベントの全般の改善点とそれに対するアイデアを記述してください。

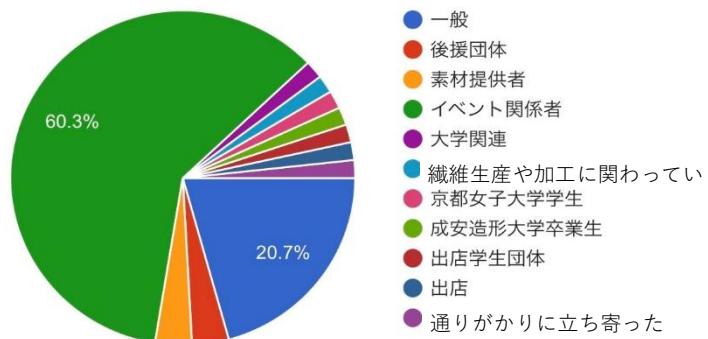
※ こちらの回答結果は「4.2 学生の声」に掲載しています。

以上

資料7 来場者アンケート (n=58) Google Forms を使用

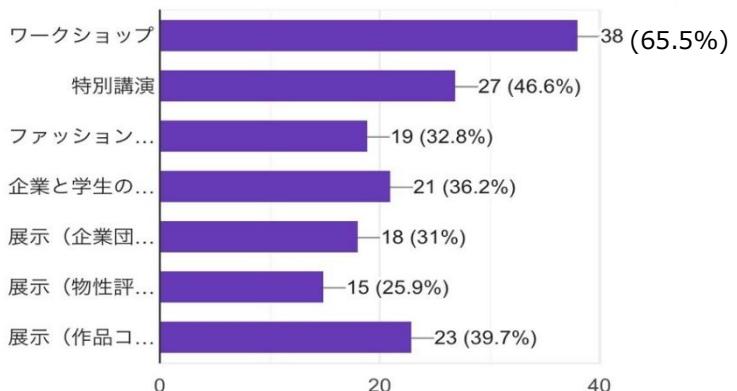
Q1. 本イベントとのご関係を教えてください。

58 件の回答



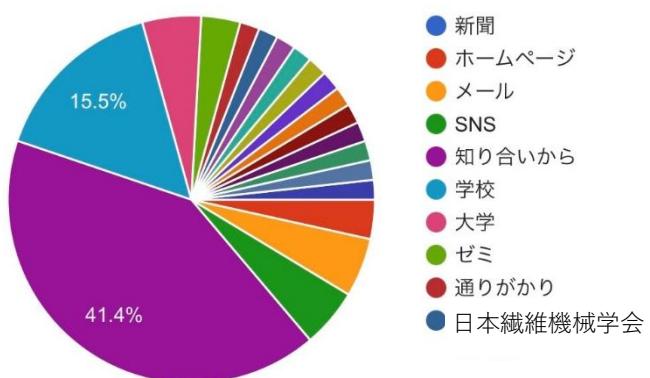
Q2. どのイベントに参加あるいはご覧になりましたか。(複数選択可)

58 件の回答



Q2. 本イベントをどこで知りましたか?

58 件の回答



Q4. 本イベントで参加あるいはご覧いただいたものについて、是非とも感想をお聞かせください。

※ こちらの回答結果は「4.3 来場者の声」に掲載しています。

付録 1

マスコミ報道

事前告知

織維製品の廃棄による環境負荷を削減することをテーマに、日本織維機械学会の織維リサイクル技術研究会が研究者と学生で組織したプロジェクトチーム「エソウイクル」は、イベント「私たちのSDG S2025」を9月4～6日までの3日間、大阪市北区で開催する。ブリーゼブリーゼ(大

纖維循環の実践見せる

エンウィクル 纖維循環の実践見せる イベント会場で衣料品回収

会メンバによるパド「FUB」の演奏などを実施する。特別講演には、京工芸織維大学の前川一郎名誉教授、サ・ールマーク・カンパニーの西沢智裕氏、茨大学の長田華子准教授が登壇する。トークショーにはシキボウ、△&△ジャパン、東洋せんい、スタイルムーン定大阪が参加する。

また、今回は織維品のリユース・リサイクル促進と循環型ビジネスモデル構築に取り組む一般社団法人「スタイルサーチュラネットワーク(TC-Net)」と連携し、使済み衣料品回収も実施する。事前に大学なに古着回収ボックス設置し、イベント当

も一般市民からの古着
持ち込みを受け付け
る。

纖維ニュース 2025-8-27

物動く

TCI-Netとエンウェイクル
古着回収と循環を実践
9月のイベントでコラボ
織維製品のリユース
・リサイクル促進と循環型ビジネスモデル構築に取り組む一般社団法人テキスタイルサー
キユラーネットワーク
(TCI-Net、大阪府泉大津市)と、研究
古着回収とアッパ

前記に「エンヴィックリ」に参加する大学などに古着回収ボックスを設置し、イベント当日おもに一般市民による古着の持ち込みを受け付ける。回収した古着の譲渡会と合わせて、学生による古着を使ったマップサーカス作品のワークショップを実施し、制作品の発表と販売などを実行する。イベント

の設施の認のくもる。中古衣料品リユース・リサイクル事業のファイバーシートディエム(堺巾)に引き渡し、再資源化などに活用。コラボイベントを通じて、古着回収の普及と繊維製品の循環を促進する。また、廃棄衣料の再利用を文化として定着させることを目指す。

2025-7-7 繊維ニュース

ペットボトル水平リサイクルで連携
エブラングループと
都城市、伊藤園など
エブラングループのペ
ットリファインテクノロジ
ーは、宮崎県都城市、伊
藤園、遠東石塚クリーンペ
ットと「ペットボトル水平リ
サイクル事業に係わる連携
協定」を8月6日に締結し
た。

都城市で回収された使用
済みペットボトルを、ペッ
トリファインテクノロジー
によるケミカルリサイクル
と、遠東石塚クリーンペッ
トによるスカニカルリサイ
クルの組み合わせで再生す
る。

伊藤園は、その再生ペッ
ト樹脂を採用した飲料製品
を製造・販売する。

技術研究チーム
エンウイクル

大阪でSDGs
関連イベント

日本織機学会織維リ
サイクル技術研究会のチー
ム「エンウイクル」は9月
4～6日に、大阪のブリーゼ
ブリーゼで「私たちのSDGs
DGs 2020の「織維製品

の循環をめざして」を開
く。
エンウイクルは織維製品
の廃棄から生まれる環境負
荷の低減に向けて、関西で
学ぶ大学生と研究者が連携
し結成したチーム。
学生と企業のトークショ
ンや学生による織維廃材を
使ったアップサイクル製品
の展示やショーをする。特
別講演やワークショップ、織
維廃材から生まれた楽器
によるステージなどもあ
る。

特別講演は4日に京都工
芸織維大学名誉教授の前川
善一郎氏、「50年にザウール
マークカンパニーの商品開
発・教育・ライセンス担当
マネージャーの西沢智裕
氏、6日に茨城大学人文文科
学部法律経済学科准教授の
長田華子氏が登壇する。ま
た、4日に織維リサイクル
技術研究会委員長の木村照
夫氏による特別講演「織維
製品のサーキュラーエコノ
ミーをめざして」も開く。
参加大学は、大阪樟蔭女
子大、関西大、京都光華女
子大、京都工芸織維大、京
都女子大、甲南女子大、神
戸大、滋賀大、滋賀県立
大、四天王寺大学短期大、
成安造形大、立命館大。

織研新聞 2025-8-25

開催後の記事

7 (第二種郵便物認可) 材料・機器・工具

若者の意識が変わる
エンウイクル

織維廃材でファッションショー
若者の意識が変わる

織維製品の廃棄によ
る環境負荷を削減する
ことをテーマに、日本
サイクル技術研究会が
研究会の学生で組織し
た「エンウイクル」は、
会なつている。

「私たちのSDGs
DGs 2020の「織維製品

見事なドレッセ制作
ニユース」など後援



循環経済新聞 2025-10-6

織研ニュース 2025-9-10

技術研究チームのエンウイクル 学生が古着リメイク

日本織維機械学会織維リ

サイクル技術研究会のチー

ム「エンウイクル」は、大

阪・ブリーゼブリーゼで開

いたイベント「私たちのSDGs」で古着回収プロジェクト「メグルフクプロジェクト」を

初めて実施した。メグルフクプロジェクトでは、事前に大阪樟蔭女子大学や京都工芸織維大学など12校に回収ボックスを設置。200~300kgの古着を集め、当日に持参した来場者からも集めた。

学生たちが集まつた古着を組み合わせ、新たなコ



学生がコーディネートした古着

ディネートを提案したり、

会場でリメイクに挑戦する

アッ

サイ

ク

ル

ラ

ボ

」にも取り組んだ。来場

者から集めた古着で、学生が

新たなスタイルを提案

したり、リメイクでアッ

サイ

ク

ル

ラ

ボ

」を提案した。

新

た

な

コ

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

ー

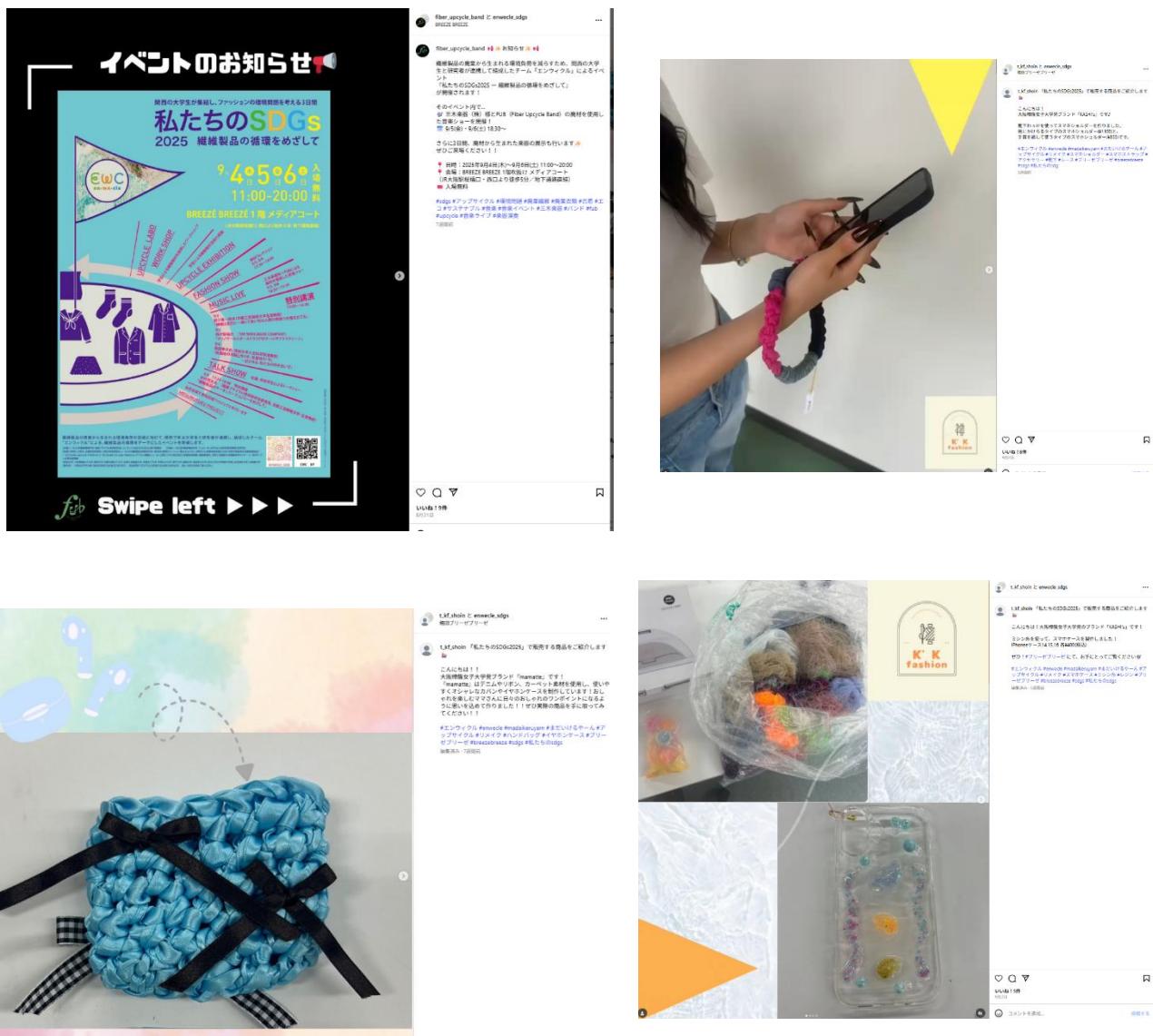
ー

ー

ー

付録 2

Instagram



付録 3

スナップ写真集

会場風景



特別講演



FUBによる繊維廃材の音楽ショー



ファッションショー



ファッションショー



ファッションショー



ファッションショー



ワークショップ



学生トークショー



学生トークショー



企業トークショー



古着ラボ



販売スペース



無断転載禁止

2025年11月30日発行

【発行所】

(一社) 日本纖維機械学会・纖維リサイクル技術研究会
「私たちのSDGs」実行委員会(エンウェイクル)編集部

【お問い合わせ先】

info@tmsj.co.jp

【ホームページ】

研究会

<https://tmsj.or.jp/lab0/recycle/recycle-index.html>

エンウェイクル

<https://tmsj.or.jp/en-we-cle/>